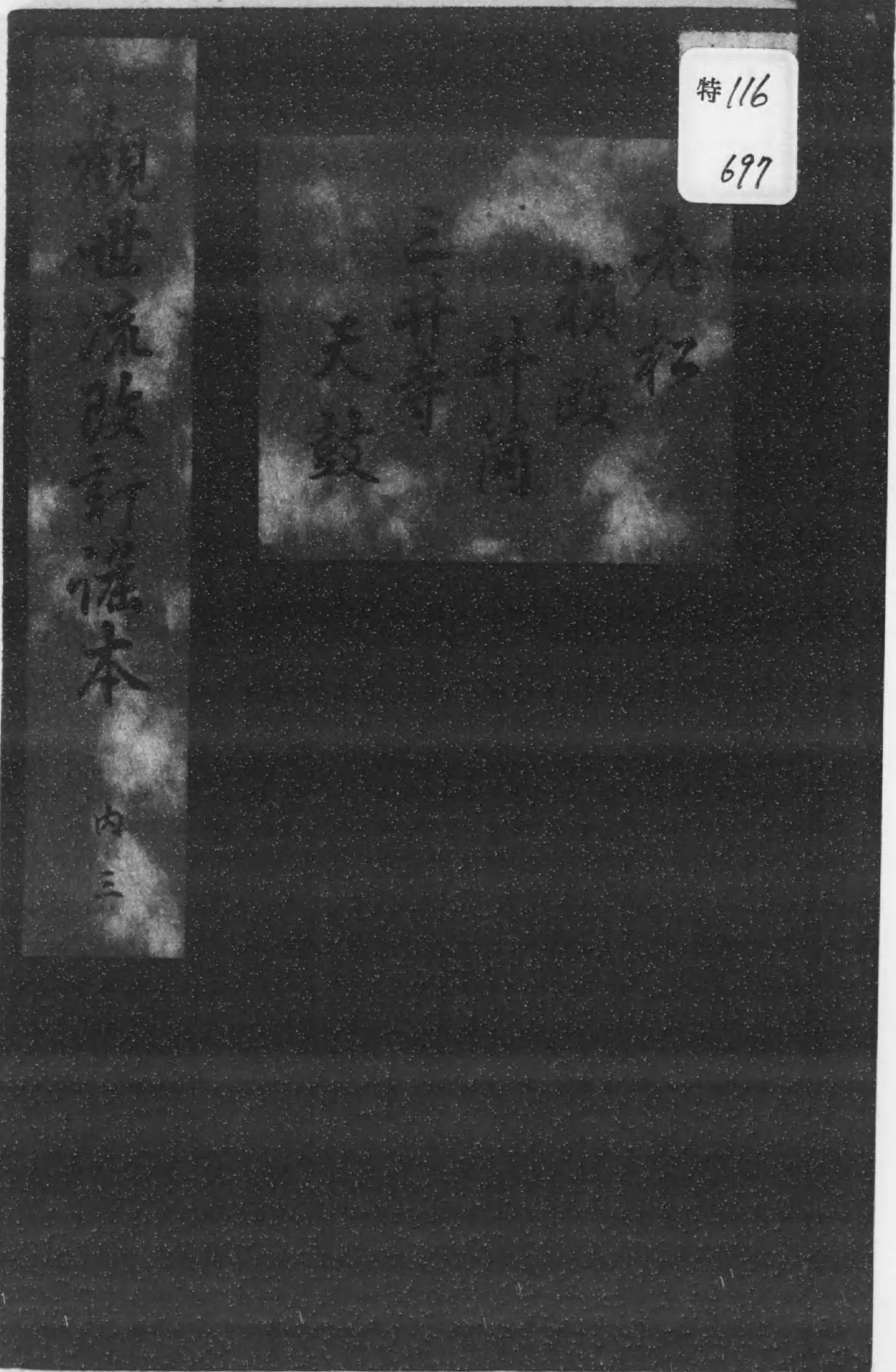


特116
697



始



特116

697

老松

頼政

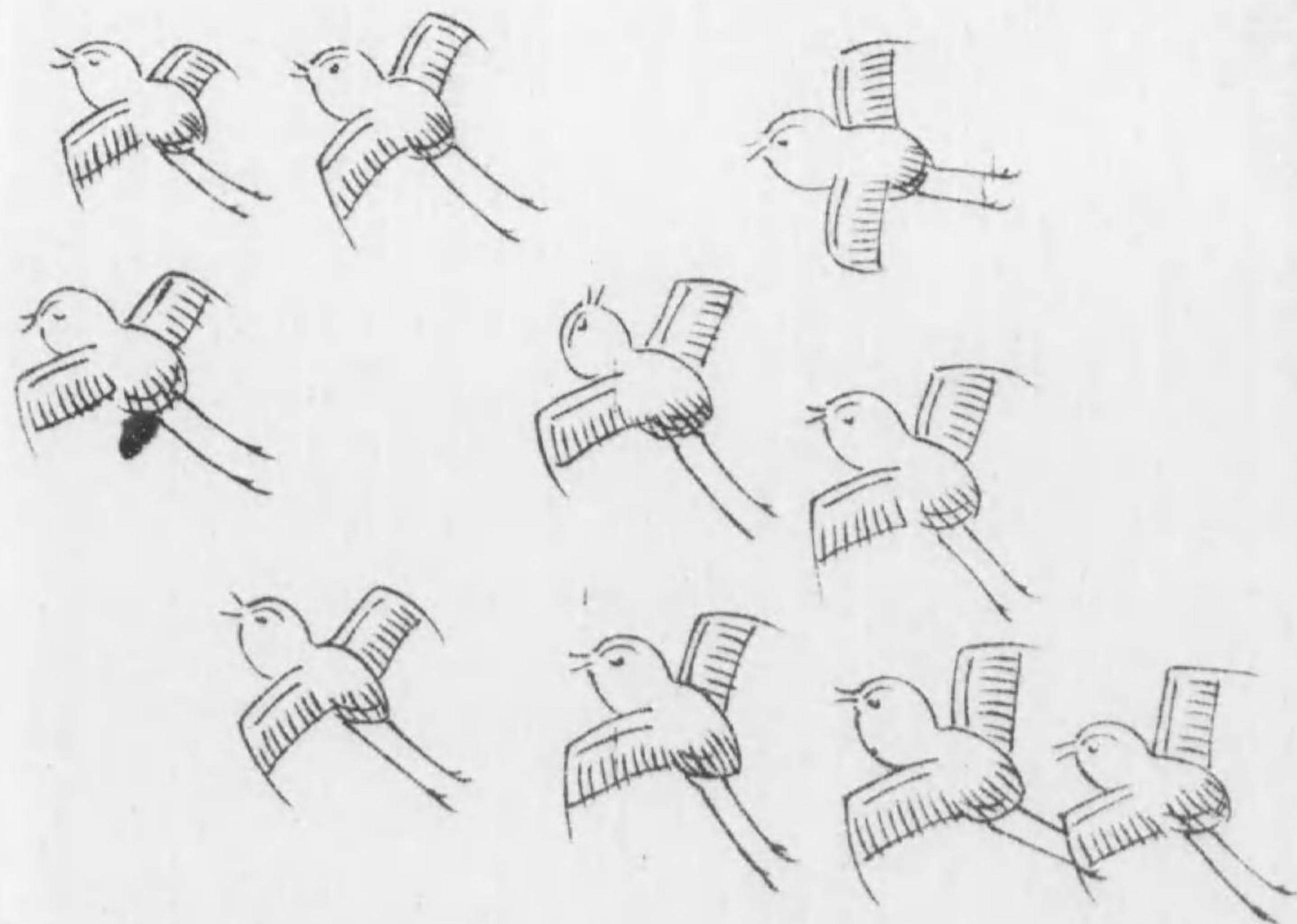
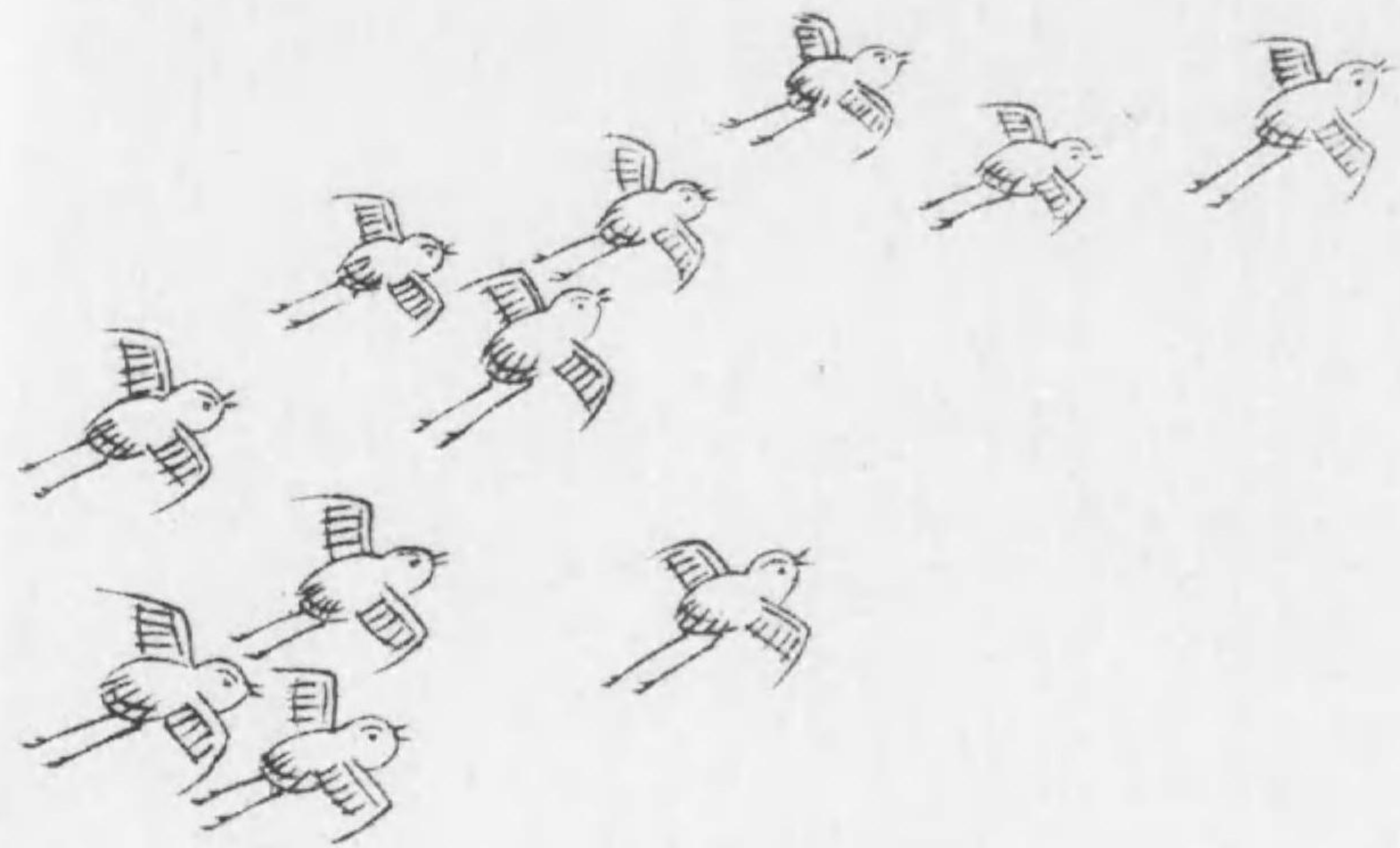
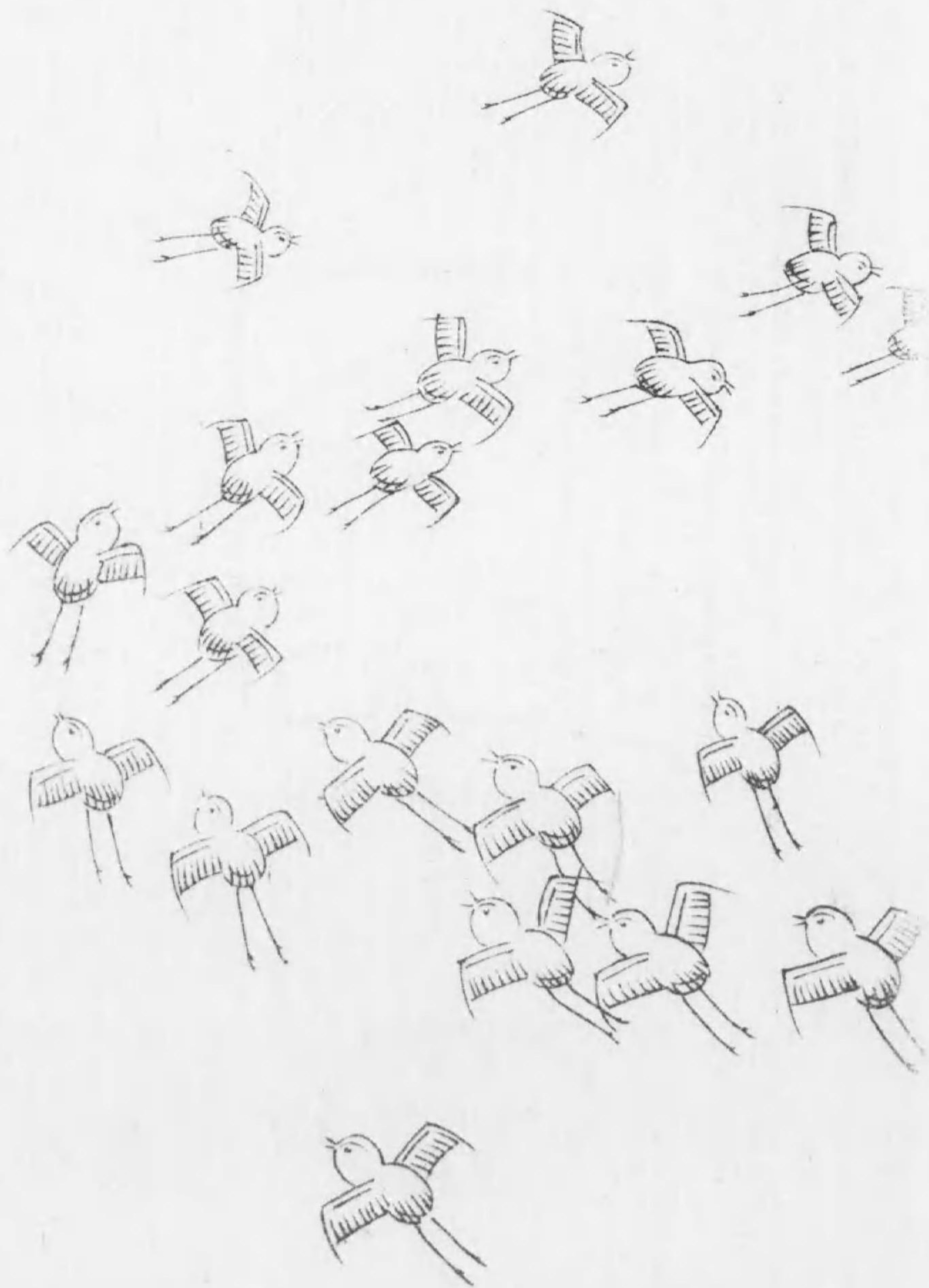
井筒

三井寺

天鼓

觀世流改訂謄本

内三



特116
697



觀之
世之



老松

解題

靈夢によりて安樂寺に詣でたる梅津某、老松の神靈、紅梅殿の神靈に逢ふことを文の表として、聖壽の長久をことほぐ祝言の意を敘したり。申樂談儀その他に世阿彌の作なりと見ゆ。曲の構造他の能と趣を異にし、クリの無きが如き、クセの上端より直に中入の地となりたるが如き、脇能としての部分々々の配置、原則的形式に外れたる所多し。されば曲として格正しきものと云ひ難けれども、舞を位静かなる眞之序之舞としたる爲、前後之に伴ひて位取りを重からしむる要あり、従ひて輕からざる曲として扱はる。

能の小書

長序の傳、返し留の傳あり。

謠ひ方梗概

高砂、難波等の神舞なるに對し是は眞之序之舞物なれば、同じく眞の脇能中にも位取り分き後段は前段よりも引き締りたる所あるべし。従ひて調子を重々しく静にし、全篇に互り確りと謠ふを要す。

シテ

前は翁姿なれば充分に抑へて靜に出づ。出の一聲は長閑なる心あるべし。サシに氣を更へて稍さらりとしたる心を持ち、下歌にて少し緩め、上歌を確りと抑へ心に謠ふ。ワキとの問答は位重く落著ありて、句毎に聊か詰める心。「先づ社壇の……」のサシは稍大きやかにて壯嚴に四圍の景を謠ふ。クセの上端は少し氣を張り祝言の心を持たしむべし。後の出はカ、ルの章の調子にて大きやかに靜に謠ひ出し、受渡し好く位を重きにとり、ワカ以下凡て確りと祝言專一の心にて急がず素直に謠ひ、「昔のむすまで松竹」を稍さらりと「鶴龜の」を稍大きやかに謠ふ。

ワキ

能にては三人なれど素謠は一人なり。位重き能なれば其心にて少し靜に音調確りと謠ふべきものとす。

地

他の脇能よりも位を稍靜にとること、確りと力を持ちて謠ふべきことを通則とす。初の「もるわれさへに」は充分静めてしつとりと出「朧月松閣」はシテのサシを受けて大きく稍さらりと謠ひ、クセは静めて確りと謠ふ。曲は形式變則にて上端に續きて中入の地となり居れり。従ひて上端後はシテを受け、祝言の心を旨として確りと謠ひ進み、静めて中入となる。後はシテよりも少し運ぶ心持を程として謠ひ、舞の前を充分に静めて

納め、キリは乗り好く確り祝言の意を諡ふ。

辭解

關の戸ささて

秦平無事にして關所々々も門を戸ささず、旅行の自由なるをまづ諡ふ。

梅津の某

梅津は京都の西方、葛野郡の一村なり。其梅津に住める某の

北野 北野天神宮を略して呼ぶ。宮は京都北野にあり。續日本後記に「北野に天神地祇を祭り(承和三年)と見え古く天神の社ありしものなるが、天徳三年此に菅原道真の廟を立て、其靈を合祀したるより天満自在天神宮と稱して崇敬盛になりたるものなり。合祀以前の天神は今地中に残り北野天神社と云ひて別に祠あり。又攝社の老松社は菅神遺愛の松の靈を祀るといへり。

筑紫 九州筑前一帶の古。安樂寺 筑前筑紫郡太宰府町なる太宰府神社の地に在りし寺。菅公謫所に薨じたる時柩車安樂寺に到りて動かざりしかば寺中に其靈を祀り天満自在天神と號したり。それより四方の参拜者多く中古頗る盛大なりしが、今は寺號亡びて天満宮のみ残りたるなり。即太宰府神社なり。

秋津洲 日本國の總名。正しくは「秋つしま」と云ふべきなり。こゝにては「豊なる類。御代なればはらかのにえもけふ供ふなり」と出でたる類。用例多し。

御調の道 高麗唐よりの貢船は筑紫に著くなれば「道の末」といへ。梅の花笠 古今集「鶯の笠に縫ふてふ梅やど」又「青柳の片糸によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」などあるを借る。まづ梅といひ次に松と云ひて老松、紅梅の語を起す。笠に縫ふとは吳竹集に「鶯の梅花の梢をあなたこなたに飛びかふは笠を縫ふに似たり」となり。

十廻 本朝文粹の大江朝綱の文に「松花之色十廻、豈唯天意乎」と見ゆ。古、松は風を逐つて春を迎へて 和漢朗詠集に「逐吹潜開、不待芳菲之候。迎春乍變、將希雨露之恩」とあるを二句に別ち用ふ。上句は梅花の春開なる時を待たずして春風の立つに従ひ密に開く意。下句は冬枯の木を雨露の恵を待ちわぶる意。

年のほもり 「年のほは」は毎年の意の古語。次の「春を迎へて」に續く詞なり。こゝれを「葉守」に云ひかく。葉守は樹木を守る神、「葉守の神」の畧なり。

宮寺 神を祀れる寺。又は僧の仕ふ社。此には安樂寺をさす。敷島の道 和歌。此山の

り。こゝには「葉守の松」と續けて老松の神の意に用ふ。「松の戸」は松立てる門。安樂寺を天原山といふこと、筑前續風土記筑紫紀行等に見ゆ。其名によりて「此山の天」と續けたり。

天ざる雪 古今集に「梅の花それとも見え久かたの天を古枝にかけたり。降る 飛梅 拾遺集に「流され侍りける時、家の梅の花を見侍りて」と詞書して載せたる菅公の花に云ひ次ぐ。降る 飛梅 詠に「こち吹かば句おこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」とあり。縁起に「此御詠により筑紫に梅の飛びけるとなん、これより飛梅とは云ふなり」と記せる如く、後人此菅公の詠に假託して飛梅の話柄を作り、安樂寺中の老梅を飛梅と稱したるなり。安樂寺に老梅樹ありし事金葉集の經信の歌にも見えたり。菅公の詠と相俟ちて此口碑を生じたるなるべし。

紅梅殿 拾芥抄に「紅梅殿五條坊門北町尻西町面、北野御子家」とあり。紅梅殿は菅公生前松を愛したる爲此末社を生じたるものか。筑紫紀行に「老松社は島田忠臣即菅公の御伯父君なりといへり」と記せり。

紅梅殿は御覽ずらん 「見らるゝ通色も若木にて花守まで花やか。もる我さへに」老松の方は松のみならずを守る我までも年老いての意。

翁さび 老人めきたる意なるに引きかへ云々との意。北に峩々たる青山 大江匡房の參安樂寺詩に「北有崔嵬條に四王院大城の山北に。隴月松閣の中に映じ 隴なる月影の松林の中なる高殿にさし入るをいふ。そばだち云々」とあり。

記に「舊跡のあり様松杉の多くさられたるに、さすがにところなくに残り、後は青山をびえて云々」。筑紫道記に「鳥居のさし入より池廣く松杉敷そひて云々」など見ゆ。松閣の字、光悦諡本には松柏としたれど卯月本の筆者石

老松

老松

老松

老松

老松

老松

老松

老松

老松

老松

老松

老松

田盛利が書きたる寫本及び光悅本以前の寫本に松開とあり。南に寂々たる瓊門あり瓊は玉なり。瓊門とは華麗な

他流にて松柏と謠ふ流義もあれどその語の出所明ならず。南に寂々たる瓊門あり瓊は玉なり。瓊門とは華麗な

る門の意。天満宮の斜日夕日の竹林の間に透射する意。匡房の詩には「修 火焰の輪塔火焰の形を

社は南に向へり。 斜日夕日の竹林の間に透射する意。匡房の詩には「修 火焰の輪塔火焰の形を

塔の翠張紅閨美しき几帳、美しき寢室。 古寺觀世音寺をさす。九州道の記に「右の方七八 晨鐘夕

梵朝夕の勤行をいふ。昔公の謫所にて作れる不出門といふ詩に「都府樓纒看瓦色、觀音寺唯聽鐘聲」こあ

るにより斯く續けたるなるべし。されど此寺康平七年烏有に歸して再興せず。謠曲創作時代には唯礎石を遺

したるに過ぎ。かゝる浮世のことわり榮枯盛衰の理。 漢家廣く上下に互りて支那を指す。 好文木晉の起居の註に

開、廢學則梅不開、故梅云「好文木」とあるを引く。 松を大夫さ大夫は五大夫。秦の爵名なり。史記始皇記に「始皇東行郡

封其樹爲五大夫」とあるに出づ。されど此文、樹とのみありて松樹と無し。之。御垣守行末久しく見んと

を松樹としたるは、藝文類聚木部に「頼得松樹」と記せしに起りたるなるべし。御垣守いふを「御」にかけ

て御垣守と續けたり。御垣守はこゝ、神はこゝも同じ名京都の北野も此所に祀れる神も同じ名の天満

にては御垣守を守る末社の神の意。神はこゝも同じ名京都の北野も此所に祀れる神も同じ名の天満

「天満つ」と引き延べ、其縁にて「空」といひ空の暮れゆく意にか天神なりとの意。それに續けて「天満」の詞を

けて「くれなる」と云ひ「くれなるの花」と續けて紅梅の意とす。萬代の春さかや云「これは「神さびて失

びて失せにけり」とありしを、徳川氏の中頃、將軍の松平姓に對し松の失する天満宮の満の 風も嘯く寅の時孝經の序

といふを憚りて謠ひ更へたるものなり。「神さびて」神めきてすこく尊き謂。風も嘯く寅の時孝經の序

而風起」とあるにより「寅の時」を云はんとして「風まればと 客をいふ。古語。名こそ老木の云名

も嘯く」と云ひかけたり。寅の時は今の午前四時。まればと客をいふ。古語。名こそ老木の 花のは

老松といふ老木なれど松の縁は若々し天満宮の満の 満ちたる字に通はす。 さす枝の舞のさす手に、若枝

との意。「縁」と云ひて「空」の語を起す。満ちたる字に通はす。 さす枝の舞のさす手に、若枝

袖舞の縁にて袖といふ。若木の花 千代に八千代に和漢朗詠集に「君が代は千代に八千代にぞ、れ

は初句を「我が君は」とし、古今六帖には「初二句を「我が君は千世にましませ」とせり。詠み人明ならず。拾遺集に

は安法法師の歌とあれど如何。歌の意は、君が代の久しく安らかならん事は、さぞれ石川などにある小石の年

を經ると共に長じて巖となり。更に若生して昔の佛を失ひ松竹鶴龜 内侍所千首の日野大納言の歌に「仰

果つる千代八千代の後までも易る事あらざるべしとの意。松竹鶴龜いづれも齡長き譬に引かるゝもの。

き見る君にはあかじ鶴龜に此君 時の帝をさす。王子獻が竹を愛して此君と云ひたる古事に神託

松吳竹のよを添ふるとも。此君よりて此語を用ひたりといふ説あれど附會に過ぎたり。 神託神の

装束附

前シテ (老翁)

面小牛尉、尉髪、襟淺黄、着附小格子厚板、白大口、茶水衣、緞子腰帶、尉扇、杉帯。

後シテ (老松の靈)

面皺尉、白垂、初冠、白地金緞鉢卷、襟淺黄、着附無紅段厚板又は小格子、萌黄大口、白地狩衣、縫紋腰帶、神扇。

ツレ (男)

襟赤、着附無紅段厚板略して無地熨斗目、白大口、水衣、縫紋腰帶、墨繪扇。

ワキ (梅津某)

大臣烏帽子、赤上頭掛、着附段厚板、白大口、裕狩衣、縫紋腰帶、扇。

ワキツレ (從者二人)

大臣烏帽子、萌黄上頭掛、著附厚板、白大口、赤裕狩衣、紋附腰帶、扇。

真之脇能

老松

正月

前ツレ 男 老松ノ靈(前ハ老翁)
ワシキテ 梅津某

早次第上(症ニナク確リ)

(三人ノツヨク)
(指子合)

げよほまれの四方の國ハニトげよほまれの
四方の國トキの戸トキすトキでトキ通トキせんトキそも

そもこのれ都の西梅津ニニガシの何某ニニガシ

我が事あり。あれ北野キタを信ツト常ツよ歩アユ

ふぢはなびの所よ。ある夜ヨの靈レイ夢ムみよ。

あれを信ツぜツが筑紫ツクシ安樂寺アンラクジよ素サ詣ケ申イ

老松

一

せと。あらたなよは雷草のよ。紫彩りての向。
(大キク) 唯今九州よ下向仕の
(道行上) 何事もいよ
(打切) かのよ此時の心よあやよ此時のたぬも
 ありや日の本の國。葦ある秋津洲の。
(前) 浪も音あまの海。高麗唐土も残り
 ありは調の首の末いよ。安樂寺よも
 著きよけつ。安樂寺よもいふらり

(長閑ニ確リ) ツツニ上
(真ノ一声) 梅の花は春もきて。継よよ鳥の楯
(拍子不き) かのよ 松の葉色も時めきて。十かへり
(下) ありき。緑あや。風を逐つて。潜よ
 聞く。年の葉守の松の戸よ。春をゆくへ
 て。忽ちよ。雨の四方の草木まで。神の
 恵よ。麻糸くか。春めき。渡の盛あな
 歩を運よ。宮寺の史のいけき。春の日よ

(拍子合) 下歌中
(兼ラカヘテエツタリ) 打切

小 謠

上歌(嚴カニ確リ)

松キ根ネの山ヤマ向ムカを傳ツトふ苔コケ席シマ山ヤマ向ムカを
 傳ツトふ苔コケ席シマ敷シ島シマの道ミチまでもモげキよキま
(シツル)ありや此ココ山ヤマの天アマぎの雲クモの古コ枝エやもモあオほ
ハナ惜シまマるル花ハナ盛サカ手テ折ヲりやヤもモ守モりリ梅ウメの
ナ花ハナ垣カキいイざサやヤあアらラんン梅ウメのハナ垣カキをヲあアらラん
ウらんン。ワ早ハヤ知チりリあるル老ロ人オジンよヨ尋タねネ申マせ
シんンテテ。シんンテテ。(位重ク落著テ)あなたノ事コトのハ何ニ事ト

めていぞ早 圃ハまマ及びビびビたるト飛ト梅ビとト何イ
 れの本ノやヤ申マいイぞソ あアらラ事コトもモ愚オろロかカ
 わワらラんン唯タ紅ベニ梅バシ殿ドノとト崇アめメ申マいイらラんン

早 (渡シナク) けケよヨくク紅ベニ梅バシ殿ドノとトもモ申マいイらラんンぞゾやヤ。
中 (長閑ニ) (枯子不台) かくカクとトけケあアくクもモ活ゴ詠エ教カよヨうウ。今イマ神シ木ノ
 とトありアリ給タへヘばバ崇アめメてテもモ猶タ飽ウかカらラんンぞゾ。
早 (渡シナク) 早 (渡シナク) 早 (渡シナク) 早 (渡シナク) 早 (渡シナク)

何と云は賢い分りていさぞ 早(確)げよ

げよしも垣結びまはらばまぢあやむか。

真の妙ある神本と見えたり カレ上つさま

これ老松の シテ上(落著テ)おそくも心得給ふもの

あま紅梅殿は活賢むらじ色も若木 ツカスキ

の花守までも華やあらよ トまか

て 地下歌中(静ニドツシリ)守るあはれは ト老が身の景 カク

●獨吟仕舞

おびたるまつ人の翁寂 トまの

もと老松と活賢むらぬ神慮もい ト

かぞうや 早(健カニ)猶と當社のいせれ委 ト

しく物語のいへ シテ上(履カニ位大キク)はつ社壇の體 ト

を 前(受ケテ大キク)採み奉れば ト嶽とたる青山あり

眺目松岡の中は映し南は寂 トなる

霞あり斜日竹竿のもとも透けり ト

シテ中(下フシリ)

左よ火焰の輪塔あり 翠帳紅圍の粧

ひ昔や忘れぬ。右よ古寺の蒼跡あり。

晨鐘の梵の響絶うることあり

クセ下(静ニ確リ)

げよ心なき草木ありと申せども。

から浮世のことわりなき知るべし知るべし

諸木の中は松梅の殊は天神の法慈愛

して紅梅殿も老松も皆末社と現し給

(前ヨリ連ビテ)

へり。さるが此二つの木は我が朝よりも猶

漢家の徳を現し唐の帝の時々の

國は文學を盛んあらが花の色を増し

白常より優りたり。又文學またれが白

もあく其色も深からまをさそて文を

好む木ありけり。梅やば好む木

といひ附けられたれ。さそ松やまといふ

大雨頻ふ

事ハ秦の始皇の時天候テシノヒツの如き
 曇り大雨頻ふ降りクモリかば帝雨を
 凌ぐんと小松の陰シノに寄り給ふ此松俄
 り大本とあり枝や垂の葉や並べ本の
 向きもまや寒きと其雨を漏さざりし
 かの帝大まといふ爵を贈り給ひ
 より松を大まとい申さありサカキ

小話

原文ハ
 花も松も諸共よ
 神さびてませまけり
 いと神さびてませ
 ふけり 中入
 トアリシヲ徳川氏ノ
 松平姓ニ阿リテ謡ヒ
 更ヘタルモノナリ

早上歌(長閑ニ滞リナク)
 (三人)
 待議
 (拍子合)
 打切

名高き松梅の地花も千代まで(前ヨリ遅ヒテ)の行
 く末久ヒサトは垣守守るべし守るべしや
 神ハとも同ナ名ノ天満アマツつ室もムロこれか
 の花も松もハナもろともナは萬代マンダイの春
 とあや千代萬代の春とあや中入
 嬉ウレシしウレシあやウレシあやウレシあやウレシあやウレシ
 此松蔭コノマツノカゲに旅ツリ居ル

して風も嘯く宙の時神の告をも待
 ちて見ん神の告をもまちてみん
 いろ紅梅殿今夜の客人も何と
 慰め給よき
 梅も色添ひ
 老木の若緑
 空澄み度る神もぐら
 歌やうたひ舞をまひ舞樂を供よ
 (拍子不合) 後シテ 出端 (位) 重クドツシテ
 (節末ク) 申ス
 (確リト運ビテ) 地 (確リト運ビテ) 地 (確リト運ビテ) 地 (確リト運ビテ)
 (節末ク) 申ス
 (確リト運ビテ) 地 (確リト運ビテ) 地 (確リト運ビテ) 地 (確リト運ビテ)

真之序之舞
 獨吟 (拍子不合) 仕舞
 シテウカ上 (兼直ニ確リ)
 寺の聲も満ちたるありがたや
 さま枝の
 花の袖
 これ老木の神まつ
 これ老木の神まつ
 これ老木の神まつ
 (急カヌシツカリ) 地 (急カヌシツカリ) 地 (急カヌシツカリ) 地 (急カヌシツカリ)

小 誦 (拍子不合) 打上 (中) 地キリ上 (健カニ運ビテ)
 ままで松竹鶴亀の
 授くるこの君の行く末護れと
 (拍子不合) (拍子不合) (拍子不合) (拍子不合) 中 (健カニ運ビテ) 中 (健カニ運ビテ) 中 (健カニ運ビテ) 中 (健カニ運ビテ)
 (拍子不合) (拍子不合) (拍子不合) (拍子不合) 中 (健カニ運ビテ) 中 (健カニ運ビテ) 中 (健カニ運ビテ) 中 (健カニ運ビテ)

我が神託のつげや志らざる。松風も
梅も。久き春こそめでたけれ。

頼政

解題

旅僧宇治のほとりの風光を眺め居たるに、源三位頼政の亡靈現れ來り、宇治の名所を教へたる後平等院に誘ひて治承の亂の昔を語り、僧の巾を受けて成佛を喜び、重ねて當年の軍物語をなす。世子六

謡ひ方梗概

三修羅中にては稍すらりとしたる曲なり。

シテ

意氣は壯者を凌ぐとも身は衰へたる老軀なり。シテは一貫して此味を旨とすべきなり。まづ出の呼掛けは稍離れたる處より聲を掛くる心なれど、羽衣の天人が霞隠れより呼び掛くるとは甚趣異なれば、充

分抑へたる聲にて確りと大きく謡ふ。以下の對話は事無げなる間に奥ゆかしき處あるべし。位は抑へて重く取る。「いさ白浪……」の一章は確りと謡ひて外れを稍軽く謡ふ。「我が庵は……」以下の一節も略同様なり。「のう
旅人」は朝日山より月の出づるに目を轉じたる心なるべし。平等院に到りてよりの詞は句毎にそれ／＼の情緒無かるべからず。「かやうに申せば」以下は物寂びて、しつとりと抑へ心に謡ひ止む。後は前半とは趣を更へ、是は當年戰場に立ちし頼政の心を心として謡ふ。「閻浮戀しや」と物珍しげに人世を思ふ心を以て心持し、「伊勢武者は」と再び氣を起す。「うたかたの」よりは一聲の調子なれば稍引き立て、大きく謡ふが宜し。以下ワキとの掛合漸次寄せて地に渡す。クセの上端は氣を上げて強く弛み無く謡ふ。「さる程に」以下の語は大きく氣を張つて、老武者の位を忘るゝ事なく、落著好く句間を充分にとつて謡ふ。句々それ／＼の心持あつて「名のりもあへず……」と強々と地に渡す。「これまでと思ひて」に少し氣を抜き、「埋木の」は氣を乗せて謡ひかけ「身のなる果は……」心して謡ひ静む。

ワキ

曲柄が輕からぬものなれば、其心を以て派手／＼しからぬやう謡ふ。道行、待詔は充分弛み無く謡ふ。

地

一の地「名にも似ず」の一章は名勝の夕暮を見渡したる心の外に稀代の老将の懷舊の思をも寄せ、調子を下に取って靜に寂しくおつとりと謡ふべし。假名扱ひを素直にしイロある所も生み字(母音)を凡て籠め

て扱ふ。中入の地は模糊たる夕ぐれの影ほのかなる月光の中に感慨に堪へざる老将を送り入る謠なれば充分に静めて物寂びて謠ふ。後はシテに従つて緩急を受け、大體合戦當時の心なるべし。サシはさらりとしたる運び、クセは確りと淀み無かるべし。上端の後は取分き強みを本として弛緩無きを要す。「くつばみをそろへ」はシテを受けてすかさず出、以下強々と謠ふ。「さる程に入亂れ」にて氣を更へ、稍さらりと軽き心。「これまでと思ひて」はシテを受けて其儘續け、前よりは少し緩みを持ちて謠ふ。「あと訪ひ給へ……」は静に確りと受けて出、其位にて謠ひ納む。

辭解

洛陽 京都をさす。 **南都** 奈良。京都より南に當る。 **天雲の** 萬葉集に「天雲のいかづちの上」に「天雲のいほが下に」などあるに、

り「い」の枕詞に轉用して稻荷と續けたるものか。「雲の居る」といふ意にて「い」に續けたりとの説もあれど其用例無し。 **稻荷の社** 山城國紀伊郡、深草山の北の峯にあり。和銅年中、秦伊呂俱の創建。

山を稻荷山といふ。 **深草、木幡、伏見** いづれも京都洛外の名勝。深草には仁明天皇の御陵あり。木幡山のへり今官幣大社。 **深草、木幡、伏見** いづれも京都洛外の名勝。深草には仁明天皇の御陵あり。木幡山のへり今官幣大社。

天皇御陵の地。木幡と宇治との間は澤地にて澤田あり。新拾遺集に「冬の夜の寒けき月に數見えて伏見の澤にわたる水鳥」。 **宇治の里** 山城宇治郡より久世郡にかけての郡に宇治村あり。久世郡に宇治町あり。 **宇治川** 宇治の名。 **勸學院の雀** 勸學院は往古(創立は弘仁十二年、治承四年に焼けて後建たず)四條大宮に在りし藤原氏の子弟の學問所なり。此所に住める雀は朝夕に聞き馴れて蒙求を囀るといふ古謠を引き、處の名所を聞き返したるなり。 **喜撰法師** 元亨釋書に由るに喜撰は宇治山に居りて仙術を修し後雲に乗り去りて往

きし所を知らずと云へり。和歌の作者として古今集の序にも書かれたれど世に傳はる所の作は「わが庵は都のたつみしかぞ住む世を宇治山といふなり」の唯一首なり。同序にも「よめる歌多く聞えねば云々」と記せり。其古蹟なりといふを喜撰一に宇治山といへど固より定かならず。無名抄に「三室山の奥二十餘町ばかり山中へ入りて宇治山の喜撰が住みける跡あり。家は無ければ石すゑなどさだかにあり」とあれど如何。こゝにては先づ喜撰の故事によりて宇治山を云ひ起し、 **大事のこと** 喜撰法師の庵は名にのみ聞えて所の明ならぬこ

事なり。 **大事のこと** 喜撰法師の庵は名にのみ聞えて所の明ならぬこと前記せる如し。されば大事といへるなり。

檣の島、橋の小島が崎 共に宇治の名勝、檣の島は宇治町小倉村の北、宇治川と巨椋の池との間に在り。しなごの名所なり。往古は河中の洲なりしと見ゆ。橋の小島が崎は宇治橋の西にありて舊橋姫社の所在なりと云へど地明ならず。山州名跡志にも「今不詳」とせり。後嵯峨上皇の歌に「袖の香やなほ残るらん橋の小島によせしよはの浮舟」名にたつ。 **慧心の僧都が** 慧心の僧都、正しくは慧心院の僧都、横川の高僧源信の事なり。僧を橋に云ひかけたり。 **朝日山** 宇治名勝の一。夫木集に「朝日山嵐や色に

りと傳。 **朝日山** 宇治名勝の一。夫木集に「朝日山嵐や色に出でぬらん紅葉ふりつむ宇治の柴舟」。 **山吹の瀬** 宇治の名勝なれど所在不明。山州集後鳥羽院の歌に「秋風の山吹の瀬の岩浪にぬる夜よそなる宇治の橋姫」。 **島小舟** 他流にては古くより柴小舟と謠へり。宇治に柴舟の是非を

わかぬげしき 山が好しとも、川が好しとも評し難き。 **名にし負ふ平等院** 宇治橋の南二町左大臣融の別館の跡を永承七年藤原頼通修理して寺とし、平等院と名づく。 **釣殿** 増鏡に「寶治二年宇治御幸、平等院の釣殿に御舟よせて下りさせ物ありしな。 **扇の芝** 頼政が扇を敷き自害したる所と云ひ傳るべし。 **扇の芝** 頼政が扇を敷き自害したる所と云ひ傳るべし。 **宮戰** 宮は以仁王。頼政が宮を奉じ

馬 行人は往來の人、征馬は往來の馬、名將の古跡。 **月も日も** 此戰は治承四年五月廿六日。大正五

、 **現中宿** 源氏物語に「宇治のわたりの御中宿」と見え、是を解きたる花鳥餘情には「南都下向の人は宇治まで下り、こゝにて敗れたるなれば」夢の浮世の中宿の宇治」と續けたるなり。 **宇治の橋守** 古今集に「千早ふる宇治の橋守なれをしぞ哀とは思ふ

ひかく。頼政當年 **遠方人に** 古今集の旋頭歌に「打ち渡す遠方人に物申すわれそのそこに、白く咲ける七十五歳なり。 **遠方人に** 古今集の旋頭歌に「打ち渡す遠方人に物申すわれそのそこに、白く咲ける七十五歳なり。 **遠方人に** 古今集の旋頭歌に「打ち渡す遠方人に物申すわれそのそこに、白く咲ける七十五歳なり。

波枕 水邊近く枕する謂。

血は涿鹿の

涿鹿は支那太古に黃帝と蚩尤と戦ひし地なり。大軍入り亂れ戦ひて血は河水の如く漲り、血の浪に楯も流れんばかり、斬り合ふ及に骨も砕くるばかりなる様を云ひたるなり。

世を宇治川

世を憂して云ひかけて宇治川に續く。此使ひ様前後に多し。

網代

竹を組み水中に置きて魚を取る漁具。往昔京都附近にては主として氷魚といふ小魚

閻浮

波の荒き意に續けて「あら」と云ひかけ、「閻浮戀し」と云ふ。閻浮は閻浮提の略、もとは須彌四洲の一名なれども轉じて人間世界の意に用ふる語。

武者は

宇治の戦の時、頼政の子仲綱が、寄手の伊賀伊勢の勢が宇治川に押し流さうたかた 古語。泡を

蝸牛の角の争

白氏文集に「蝸牛角上争何事」とあり。小事の争奪の意。超人間界より宇治の戦を見

法體

僧形。紅は園生に植ゑても 曾我物語に「實にや園生に植ゑても紅の焦るゝ色の現れて他所に見えしぞ哀なる」。

五十展轉の功力

法華經の句。次より次へ云ひ傳へて五十人に及びても開法の利益に差別なき功力。經文の功德には直接間接の區別なきを説ける語な

直道に

五十人を隔て傳へたる經文にても成佛疑ひ無きに、佛在世 釋迦在世の當時。

高倉の宮

名も高しの意をかけて高倉の宮と續けたり、高倉の宮は後日河院の第二の皇子以仁王なり。頼政破れて後平等院を落ちて井出の渡

雲居のよそに

雲居は禁中、宮の内より宮のよそに忍び出で給ふ意。

有明の

折から月の末つ方なば有明月の頃 山城宇治郡。音羽山 逢坂山の南

山科の里

宇治郡山科村附 大和に至る公道。一度三井寺に落ちしも再び

大和路

南都を頼まんとて大和路に急ぎたるなり。

宇治橋の中

間 長門本平家物語に「宇治橋を中三間ばかり引きて、暫らく平等院に立ち入らせ給ひて御やすみあり云々」。

矢叫び

波に類へて 波の音の絶間無き如く

筒井の淨妙、一來法師

共に三井寺より頼政に従ひ來りし勇僧。一來は生年十七歳

田原の又太郎

名は足利忠綱、倭藤太の後裔にて下野の住人足利太郎俊綱の子。生年 くつばみ

兄弟の者

頼政の子、仲綱、兼綱の兄弟。但、源平盛衰記 埋木の 云 頼政最

弓弭

弓の兩端の絃 を掛くる所

兄弟の者

頼政の子、仲綱、兼綱の兄弟。但、源平盛衰記 埋木の 云 頼政最

装束附

前シテ (老翁)

面朝倉尉又は笑尉、尉髪、襟淺黄、着附無地熨斗目、紐水衣、緞子腰帶、尉扇(或は杖つきても)。

後シテ (頼政)

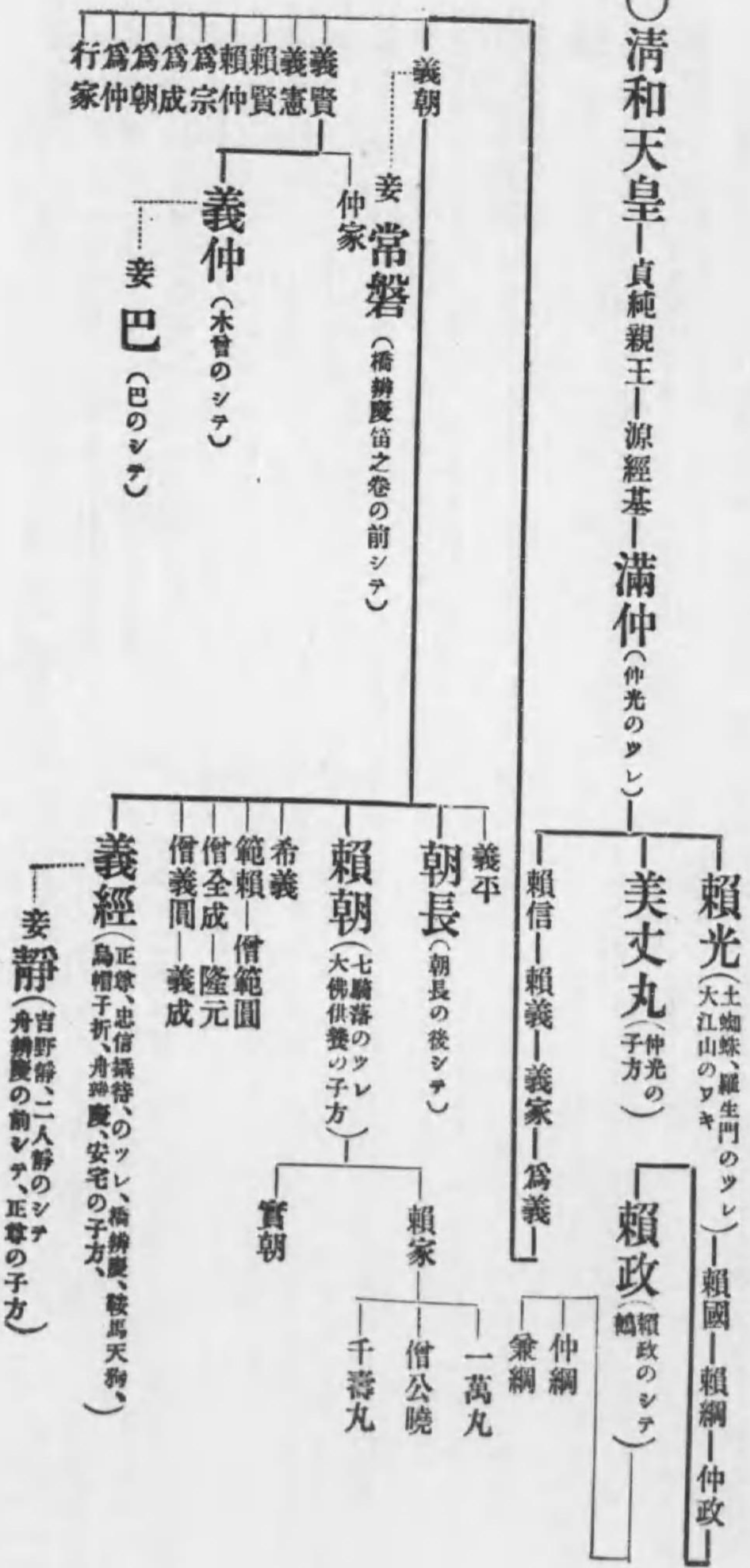
面頼政、頼政頭巾、金緞鉢卷、襟白淺黄、着附無紅段厚板、法被、半切、縫紋腰帶、太刀、修羅扇。

ワキ (僧)

角帽子、着附無地熨斗目、水衣、緞子腰帶、扇、珠數。

謠曲に作られたる 清和源氏の人々

○清和天皇—貞純親王—源經基—滿仲(仲光のツレ)



滿仲

賴光

美丈丸

賴政

義仲

朝長

賴朝

義經

六孫王經基の長子、村上冷泉圓融華山の四朝に歷仕して武名あり。亦和歌に巧にして拾遺集に其詠を撰せらる。曾て攝津の多田に在りしかば世に多田滿仲といふ。晩年髮を剃りて滿慶といへり。長徳三年卒、年八十六。

滿仲の長子、圓融以下五朝に歷仕し、射を以て名あり。大江山に賊を退治し、又土蜘蛛を退治したる外、鬼童丸を斬りたる事など武名著し。治安元年卒、年六十八。治安元年卒、年六十八。されど謠曲には滿仲の詞に「總じて美丈ならで」と云ふ者無し云々と作れり。

射を善くし又和歌に巧なり。詞花集以下歴代の集に撰せらる。宮中に鶴を射し事、達智門に僧兵を説いて退かしめし事等當代上下に喧傳す。晩年剃髮して源三位入道と呼ばる。後、以仁王を奉じて兵を擧げ宇治に敗死したるも王の令旨によりて諸源並び起ちたれば其舉兵は徒事ならず。治承四年平等院に自及、首を京に梟せらる。年七十七。

以仁王の令旨によりて信濃に兵を擧げ、北國に諸平を破り、終に京師を奪ひたるも、京に入りて後横暴を極めたる爲め範賴義經等に攻められ、終に粟津に敗死す。年三十一。首を京に梟せらる。惡源太義平の弟、平治の亂に父義朝に従ひて東に奔りしが、途に重傷を負ひ、戰に従ふことを得ず、父に請ひて其刃に死す。後平氏の爲に墓を開かる。

義朝の第三子。保元の亂に伊豆に流されしが、以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、弟範賴、義經を遣して義仲及平氏を滅し、後奥州を平げて兵馬の實權を收めたり。正治元年正月薨、年五十三。歴代の敕撰集に其詠を撰せらる。

義朝の第九子、幼時奥州に奔りて秀衡に據り、後兄賴朝と力を協せて平氏を滅したるも、幾許もなくして賴朝と隙を生じ、再び遁れて奥州に走り、文治五年秀衡の遣子泰衡の爲に殺さる。時に

常磐

年三十一。

義朝の妾、義經の母なり。義朝敗戦の後大和に隠れ居たりしが、其母の囚はれたるを聞きて自首し、後清盛の意に従ふ。

静巴

義仲の妾、常に軍に従ひて共に戦ひ武名を傳へらる。義仲戦死の後、密に信濃に遁れたりといふ。京師の白拍子。義經の妾たりしが、義經頼朝と隙を生じてより従ひて都を落ち、後吉野山中に義經と別れて捕へらる。一度鎌倉に送られ後又京に放たれたり。鎌倉若宮八幡の前庭にて舞ひし事は傳へて知らざる者無し。

二番目

頼政

五月

ワシキテ 頼政(前、老人)

ワヤ(確リ)

この諸國一頁の僧まてい。わん此程
都よひて。洛陽の寺社残りなく拜み
廻りてい。又このより南都よ来らざるや
と思ひい。道行上(健カシ)天雲の稻荷の社伏し
拜み。稻荷の社へ拜み。猶行く末
深草や。本幡の関を今越えて。伏見

頼政

の澤田見え渡り水の水に尋ねきて。
 宇治の里よも著きよけり宇治の里
ト (シツメル) ウカん上 (淀ミナクスアリ)
 よもつきよけりや遠國まで
狂言シカド (柏子不舎)
 聞き及びり宇治の里山の湊川
上 (池ミナク)
 の流遠の里橋の氣色目所多き
ナガレツヨク
 名所ありあをり里人の来りけり
名ニシヨ
 のより僧ハ何事を仰せむぞ
呼掛
シテ (抑ヘテ) ドツシリト大キク

〇半 (兼直ニ)

とむらこの處始めて一頁の者まで。
 此宇治の里よありて名所着跡残り
 なく傳教し入處よけり入るも。
 賤一宇治の里人ありが名所もも
イナ
 着跡ともツヨク白浪の宇治の河よ舟
柏子不舎
 と橋とありあら渡り兼ねたせ
ハ
 の中よむらがりある名所着跡何
ト

早稲(波ミナク) 申さるる申さるる

勸學院の雀ハ蒙求ヲ轉

と云く。處のハまま

憎うそくまづ喜撰法師の女

けの庵にの程もそ

こと大事の事やお尋ねあれ。喜撰

法師の庵ハ我が庵ハ都の巽志あそ

任もせや宇治おとくあり

りあつたも申す耐ハ知

らむら又あつた村の里の見え

の檣の島は

申し。又宇治の何島も申さ

つて見えたる小島が崎ハ

だあのが島が崎 向ひ見えたる寺ハ

早稲(波ミナク)

シテ(抑(テ確リ))

カレ上(健カシ)

シテ(落著テ)

シテ(静シ)

早稲(サラリ)

早稲(サラリ)

小 謠

上歌
ヨラク
（拙子合）

いさるま 慧心（長閑ニステリ）の僧都（和）の法（前アカケテシタリ）を説き
 寺（氣ヲカヘテ寂シク）のりく旅人（タビヒト）あは法（ゴ）隨見（ト）せよ
 名（カ）も似（ヒ）ぎ目（メ）こそ出（デ）づ朝日山（チヨヒヤマ） 打切（ウチキ） 地（チ）
 こそらつれ朝日山（チヨヒヤマ） 吹（フ）の瀬（セ）は景（カ）見（ミ）
 こそ。雲（クモ）かくだき島（シマ）小舟（コボネ）山（ヤマ）も河（カ）も
 おぼろおぼろ（カ）ちりちり（チリ）て是非（ゼヒ）や分（ワ）らぬ
 氣色（キキ）あまら（アマ）り（リ）や名（ナ）の員（イ）より都（ト）は

おぼろおぼろ

聞（キ）きよ（ヨ）

いさるま 慧心（長閑ニステリ）の僧都（和）の法（前アカケテシタリ）を説き
 寺（氣ヲカヘテ寂シク）のりく旅人（タビヒト）あは法（ゴ）隨見（ト）せよ
 名（カ）も似（ヒ）ぎ目（メ）こそ出（デ）づ朝日山（チヨヒヤマ） 打切（ウチキ） 地（チ）
 こそらつれ朝日山（チヨヒヤマ） 吹（フ）の瀬（セ）は景（カ）見（ミ）
 こそ。雲（クモ）かくだき島（シマ）小舟（コボネ）山（ヤマ）も河（カ）も
 おぼろおぼろ（カ）ちりちり（チリ）て是非（ゼヒ）や分（ワ）らぬ
 氣色（キキ）あまら（アマ）り（リ）や名（ナ）の員（イ）より都（ト）は

申（ウ）ふこの處（トコロ）は平等院（トウジツイン）と申（ウ）まは寺（テ）の
 いち法（ゴ）隨見（ト）せら（セ）ら（ラ）わ（ワ）て（テ）ら（ラ） 不知（シラ）案内（ナンブ）
 の事（コト）の程（ほど）よ未（いま）だ見（ミ）む（ム）の寺（テ）教（カ）入（イ）入（イ）
 シテ（静ニ）いまだくも（も）ま（ま）で（で）く（く）して（して）平（へい）等（とう）院（いん）
 とい（い）く（く）と（と）い（い）て（て）釣（つ）殿（でん）と申（ウ）して

面白き處もさういふは。監入るく
早面白き處もさういふは。監入るく
(サラリ)
 ち見わが。扇の如く取り残さるゝ。
オオギ
 何と申したる事もさうぞ。
シテ(押ヘテスラリ)
 此甚くおつらて物語の語つて聞かせ
(落着テドフシリ)
 申す。昔此處の宮戰のあり。よ。
ゲンザン
 源三位頼政合戦の打ち負け給ひ。此

處の扇を敷き自害し果て給ひぬ。
メイシヨオ
 さわが名將の古跡ありて。扇の形
メカル上
(殊勝ニ淀ニナク)
 又取り残して。今この扇の甚くと申す
(拍子不台)
 痛きや。さも又義よ名を得一人
ウカス
 あれども跡の草露の道のごとありて。
中
ユオジンセト
 行人征馬の行くの如く。あら痛き
ライテ白
(抑ヘテ確リ)
 や。げよよくき。弟ひるものあは。
五

志おも其宮戰の目も日もひらめき當

りてふらふ何れ其宮戰の目も

日もひらめき當つたひらめき當り

よ申せがあらあつらよそあらも旅

く。草の枕の露の世よ。波女をこと

来りたり。現とおおもひ給ひそまよ

地上歌 (素直淋シク) 夢の浮世の中宿の夢の浮世の中

宿の宇治の橋守年を経て老の浪
も打ち渡も遠方人よ物申まわれ頼
むが坐霊と名のりも敢てませよ
けり名のりもあへませよ

俣頼の坐靈假も現れあれよ詞

を交けりそや

上歌 (長閑滞リナク) 待謡 (拍子合) 思い寄るべの波枕

けもや一此庭の扇の芒を片敷
 きて。夢の契を待たしよ夢の契を
 きたりよ。血の海鹿の河をあつて。
 紅波指を流し。白刃骨を碎く。世を
 宇治川の網代の波。あら高浮恋や。
 伊勢が武者。皆氷魚威の鐘著て。
 宇治の網代。あがりける。あたらたの。

あまのいはらあまのせの中よ。蝸牛の
 角のあらそひも。はらあがりける。心
 色。あたらたあまの清事や。猶と清経
 読み給へ。不思議やお法體の身
 きて甲冑を帯し。馬経讀めと承らん。
 くらまの源三位の。其坐靈よて
 ありまきら。げよや紅の園生よ植ゑ

中(少)抑(ハメ)

ても隠れあり。名のらぬなきよ頼政

とは賢い心こそ恥かきけりた。く

し経讀み給へ。早(サ)カ(上)サ(ラ)レ。心安く思へ。

五千展轉の功かたよ成佛まじり疑

無。況(マ)と(ヤ)これ(ハ)直道(チキド)よ。弔(シ)ひ(カ)

法(ホウ)の(カ)念(ネン)ひ(ハ)念(ネン)ひ(ハ)た(ル)處(トコロ)の(名)も

平等院の庭の面。思(オモ)ひ(ハ)出(デ)たり

法(ホウ)の(カ)念(ネン)

シテ(カ)ツテ(確)リ

佛(ブツ)在(ザ)せ(セ)よ。佛(ブツ)の(説)き(ト)法(ホウ)の(場)佛(ブツ)の

説(ト)き(ト)法(ホウ)の(場)と(モ)平(ヘイ)等(トウ)大(ダイ)慧(ヱ)の(功)切

力(リキ)よ(頼)政(テイ)が(佛)果(クワ)を(得)ん(ト)と(あり)が(た)き

今(イマ)ハ(何)や(ら)包(ツク)む(ビ)き(ハ)これ(ハ)源(ゲン)三(サン)位(イ)頼(ネン)政(テイ)

執(シツ)心(シン)の(波)よ(浮)き(ウ)せ(セ)む。因(イン)果(カ)の(有)様(ヤウ)現(ゲン)

ま(あ)り。抑(オシ)法(ホウ)承(ジョウ)の(夏)の(頃)より

あ(ま)き(ハ)謀(ボウ)叛(ハン)を(勸)め(申)し。名(ナ)も(高)倉(カウ)の

●獨吟(ドクギン)サシクセ

頼政

宮のうち雲居のよそよ有明の月の
 都を忍び出で中(押ヘテシツカリ)引き時(シツル)もよ江
 踏地中(前ヲ受ケテ)や三井寺指して落ち絵(シツル)よ
クセ下(確リト池ニナク)程(拍子合)よ平家打切ヤの時を廻さきて中數萬馬
 のつたものや関の東よ遠きと聞く
 や音羽の山續く山科の里よき本幡
 の関をよそよ見えてセ八ととよ夏き世の旅

地拍子
 又
 河波河波をまたらむ
 又
 河波河波をまたらむ

地(前ヨリ運ビテ)
 急ぎウシニテ上よ寺と宇治の向よ
 関路の駒のいまもかく宮の太度まで
 落馬ゴテクバを煩ワヅラをせ給ひけりウシニテ上これいさま
 の夜法ヨクゴ寝シムあらざる故ありとて平等
 院イノのて暫シバクらく法座ゴザを構カへつ宇治
 橋ハシの中の向ムカ引き離ハナし下シタの河波カハよ

だつてもともよ百旗を靡かして寄き
敵を待ち居たり。 さら程は源平

のつちもの。宇治川の南北の岸は打ち

臨み。岡の聲矢叫びの音は波よ類へて

おびた。橋の行折を隔てて戦ふ。

身方よ。岡井の降妙。一東法師。

敵身方の目を驚かす。かくて平家

東正

ナ

(指子不き) 中(ドツシリ) カクキ ミ カタ カタ オドロ (氣ヲカヘテ) ハイ ケ

の大勢。橋の引いたる水の高。さき
難所の大河あり。さき無き渡も
やも無あり。所よ。田原の又太郎
忠綱と名のつて。宇治川の先陣われ
ありと。名のりもあへも。三百餘騎
くろぎを揃へ河水は。少くもためら
さきむら。居る。群島の翅を並ぶる羽

中(カアリテ)

地 (指子合)

頼文

地拍子
うち入れ
て

音もかくやと白はよさるるち
 入れて浮きぬは女の渡りけり
 つきものち下知しといさく
 逆巻く處やばゆらありと智べ
 馬や下手よ立てて強きよ水防が
 せよ遠れん或者よはら答を取らせ
 互に力や命をべと唯一人の下知よ

よつて。上。かん。又。の。大。河。も。も。一。騎
 も遠れよとあたの岸よちめらてあ
 れが身方の勢がわらあから踏みた
 めも。半。町。あり。響。を。ま。き。つ。て。ま。つ
 らきや揃てて。と。ち。最。期。と。戦。う。た。り。
 上(氣ヲ更ヘテサシ進ナテ)
 さら程よ入りぬれわらもわらもと戦
 ぶ。頼。政。が。頼。政。つ。る。一。地。兄。弟。の。者

も討たれりシテ。今シテ何ニやらシテ期シテさシテん中。唯シテ一シテまシテぢシテよシテ老シテ成シテ者シテのシテちシテれ中。まシテでシテ思シテひシテて中。平シテ等シテ院シテのシテ庭シテのシテ面シテとシテらシテあシテらシテむシテのシテよシテ。扇シテをシテ打シテちシテ敷シテきシテ。鎧シテ脱シテぎシテ捨シテてシテ座シテをシテ組シテみシテてシテ。刀シテをシテ抜シテきシテ。あシテらシテらシテさシテまシテがシテ名シテをシテ得シテ。其シテ身シテとシテてシテ。埋シテ木シテのシテ花シテ咲シテくシテ事シテもシテあシテらシテ。

地。りシテ。身シテのシテあシテらシテはシテてシテ。哀シテあシテらシテけシテり中。あシテとシテ吊シテひシテ給シテへシテ。僧シテよシテ。あシテらシテらシテこシテれシテもシテもシテ。他シテ生シテのシテ種シテのシテ縁シテよシテ今シテ。扇シテのシテ芝シテのシテ草シテのシテ陰シテよシテ。帰シテこシテとシテてシテ。失シテせシテよシテけシテり中。まシテちシテ帰シテこシテとシテてシテ。失シテせシテよシテけシテり中。

井筒

解題

古名井筒の女。伊勢物語の井筒の女の條を本としたる曲なり。大和の國布留の里に隣合ひて住みたる縁により、業平と共に生ひ育ち後互に慕ひあひて夫婦となりし有常の娘の靈、幼き頃丈くらべせし井筒のほとりの懐しさに其古蹟に現れて昔語をなしたる事を作れり。伊勢物語の記事を凡て業平の事とし、又其中の二三の女を有常の娘に取りなして作りたれど、業平が幼き時布留に育ち其まゝ布留に住みしといふことも、隣に有常が住みたりといふ事も、有常の娘が業平の妻たりしことも、史實としては皆肯ひ難し。作り物語として味はふべきなり。後世世阿彌の作と稱すれども世阿彌の申樂談儀にその能の事のみ記して所作の中に數へざるは訝し。

能之小書

能に物着といふ小書を附することあり。此替能にてはシテ中入をせず、舞臺にて狩衣、冠の物着をなし、直に「あだなり」とを誦ふ。ワキ待誦は誦はず。

誦ひ方便概

本三番目物の中にも位取り、誦ひ方重き方なり。野宮、芭蕉などに比べては下位にあれど清艶と荒寥とを交へたる點に於ては此曲を尤とすべきなり。必ずしも寂しからず、必ずしも艶ならずして而も通じて位靜にしつとりと扱ひ、幽玄の姿を表はすべきものとす。

シテ

次第は荒れすさびたる古寺に昔男の跡を弔ふ心なれば、靜にしつとりと誦ひ出づべし。サシは位を十分に取り假名を籠むる心を以て幽玄に扱ひながらも稍さらりとしたる味はひをもち、下歌にて又調子を

静め、上歌は高くならぬやう靜にしみよと誦ふを要す。ワキとの問答「これは此あたり」にの詞は豎物として位さらりめに扱ひ、「故ある身か」とより以下詞懸合や、確りとあるべし。サシは常のサシの如くさらりどのみ誦はず、しつとりとしたる趣有りて少しばかり運びぬるべし。以下此心得にて誦ふ。クセの上端よりロンギに互りては位を落さぬ程にて聊かすらりと扱ひ、前に比べて多少華やかなる心ばえを持たしむべし。後は前とは心持を更へ調子もや、高めにさる。さりながら位は依然靜なるべく、寂しさの中に亡婦の情調や、高まりたる心を表すべし。「あだなり」との出はサシの調子にて品よくさらりと誦ひ出し、「かやうに詠みしも」より氣を更へてかゝりめに誦ふ。ワキは節を大きく暢びやかに扱ひ、以下地との掛合は文情を酌みて賑かにならぬやう、靜にしつとりと能く趣をうつすべし。

ワキ 本三番目物にして曲柄が曲柄なればや、靜に曲の情味を損せざるやう心附を要す。「さては此在原寺は」は一息間を取りてさらりと謠ひ、シテとの問答は稍靜に、懸合よりはさらりとあるべし。待謠は靜なる心なり。

地 初の「名ばかりは」は充分抑へてしつとりと靜に附け、些の浮華なる調子無く、露深々たる古寺の風趣ありしむべし。クリより少しく運びめになり、稍華やかに、クセは餘念なき幼ごちの心を旨と謠ふべし。「心前の水も」より少しくさらりと取り、上端後は更に聊か運び有るべし。ロンギは更へて心靜にさらりと謠ひ、中入前は靜なるを宜しとす。後は文句につれて緩急心持あり。「われながら」は調子を低めにどり、音を籠めて受け、秋漸く深き廢寺の曉方の凄凉を謠ひ表すべし。句々心持少からず。

注意すべし謠ひ方 後シテの出の謠はカ、ルの章なれば最初の下ゲにて中落シに落し、「われ浮かせず。「恥かしや」は調子を直して一セイの謠ひ方に謠ふなり。

辭解

南都七堂 南都は奈良。七堂は七大伽藍。即、東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺。

在原寺 今大和國山邊郡丹波市に、在原寺即ち石上寺の古址と云ふものあり。一は大字石上に他は大字布留に在り。何れを正しとも云ひ難けれど、いづれも今は形も無し。玉葉に「形ばか

有常の息女 古今集に「業平の朝臣紀の有常がむすめに住みけるを恨むることありてしはしの間

初瀬 大和磯城郡の中、舊式上郡初瀬にある長谷寺を指す。長谷

寺は十一面觀世音を本尊としたる。大伽藍。元正天皇養老五年の草創。

在原有常の息女 古今集に「業平の朝臣紀の有常がむすめに住みけるを恨むることありてしはしの間、晝は來て夕されば歸りのみしければよみて遣はしける」と詞書して業平との贈答の歌を載せたり。又有常と業平と親交ありしことは推するに難からざればこれ取り合せて、後世有常の娘を業平の正妻なりしが如く傳へ、又伊勢物語に出でたる井筒の女をも有常の娘と解したるなり。されども有常は業平よりも僅に五六歳の年長なれば業平と其子と幼友達なるべき道理無し。**石上** 大和山邊郡の地名。一本薄などいひて假托 **閑伽** 佛前に供ふる淨水。こゝには朝毎にくむ閑伽井に **さなきだに** さうでな

更け過ぎて 夜更け時

わすれて過ぎし 草の語を受けて、忘草といふ名によりわすれてと云ひ、

いへり。一章の意味は、思はず過ぎし昔を戀ひ慕ふばかりにて、行く末

に何の待つこともなく空しく何時まで生き長らふるならんとなり。 **人** **には残る** 思ひ出ることの人の

し得ぬ世の **頼む佛の** 云ひたすらに佛を頼む意を表とし、陰に御手の糸の序とす。御手の糸は榮花物語に中よの意。 **頼む佛の** 云ひたすらに佛を頼む意を表とし、陰に御手の糸の序とす。御手の糸は榮花物語に

なまめける 若々しくて

板井 側を板にて組

むすび上げ 汲み

花水 手向の水

本願 こゝにて

意。 **在原業平** 阿保親王(平城天皇皇子)の第五子。行平の弟、和歌に巧なり。五位にして左近衛中將たりし

の如く云ひ傳へられ、從つて後世放縱拘はらざりし好色漢とのみ誤り解せられたり。されども伊勢物語は全く作者不詳にして之を業平の作とせんことは固より難く、所載の歌も業平の詠のみならず。 **昔男** 伊勢物語は和歌の断片的物語を集めたる書にして、各章多くは「昔男」云々と筆を起せり。「昔、男ありて」の意なれども、こゝには昔男といふ名として扱ひたり。其物語所載の語柄は皆業平に係る事と解せられ居たるにより、業平

を直に昔男と呼ばれたるものとして綴れり。 **跡は残りて** 在原寺は業平居住の地なり **名ばかりは** 前掲玉葉集の歌を轉用する意を寺の名 **一村ず、き** 新續古今集に「岡のべの一むらすき穂にいで、招くを見れば秋は來にけり」

まことなる哉古への **ふりにし里** 古今集に「日の光やふしわかねはいそるを借 **紀の有常の娘と契り** 伊勢物語に出でたる物語を引く。これは有常の娘と業平との事にあら

人の子ごも井のほとりに出で、遊びたるが、おとなに成るに従ひ男も女も恥ぢ交はずやうになりたり、されども男も此女を妻らんと思ひ、女も此男にと願ひて親の嫁がしめんと思ふにも從はず、其うち男の方より「つ、

井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに」と歌をおこせれば、女よりも「くらべこしよりわけ髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき」と答へなごする間に、本意の如く夫婦となりたり、かくて年経る間に男は河内の國高安の里に通ふ所出来て、しばし高安に行く、それを女悪しき顔もせず出しやりたれば、男は反て女の心變りたるものと思ひ、一夜高安に行く如く粧ひて庭に隠れ、女の様子を窺ひたるに、女はさりともし知らず、淋しげに打ち眺めて「風ふけば沖つ白波龍田山夜半にや君がひとりゆくらん」と詠じたれば、男堪へがたくなりて河内へは餘り行かすなりたり(意を取る)といふ物語あり。これを業平と有常の娘との事として詞を飾りて **知る人** 心を知る人の意。 **風ふけば** 前掲の女の歌。風ふけば沖つ白波が立つといふを序辞まじき意をもたせ、その立田山の夜の道を君は唯一 **おぼつか** 通ふ男のゆく道を覺束無く思ふ意人して行くならんよと、男の上を思ひたる歌なり。 **おぼつか** 泡沫の意。情知る歌と云ひかけてうたかたの道といひ、更に道の縁にてゆくへ **うたかた** 泡の音をかりてあはれとつとく。 **うなる子** 幼き子の意。 **心の水** 水の底と續けんための **底ひ** 互の心にも奥底なき意に綴りたり。 **うつる姿** なるは垂髪。 **おとなしく** 大人ら **恥ぢがはしく** 男は女に、女は男 **まめ男** 真情ある男の意。映ると、月日の **おとなしく** 大人ら **恥ぢがはしく** 男は女に、女は男 **まめ男** 真情ある男の意。移るとを兼ねぬ。 **心の花** 和歌。花の縁にて **筒井筒** 男の女にやりし歌。一首の意は、井筒によりかつ用ひたり。 **筒井筒** 男の女にやりし歌。一首の意は、井筒によりかつ **間** 間に著しく育ち **くらべこし** 女より答へし歌。其意は何れが長きかと比べし自分の振分髪は肩を過ぐる程たるよとなり。 **つ、井筒の女** 此贈答の歌によりて其女を假に呼びたるなり。筒井筒の女と「誰か」は「誰にか」の心なり。 **戀衣** 戀は身に纏はるものなれば、これを衣に喩へし語。 **色にぞいづる** 立田山は紅葉人ならざる事前 **戀衣** 衣を着るといふ音をうけて、「紀の有常」といへり。 **色にぞいづる** 立田山は紅葉にいへる如し。

紅葉の色に出づるよしに云ひなして **もみぢ葉の紀** こゝの「紀」は「黄」 **しめ繩** 「云ふ」を「結ふ」にか己の心の色に表るゝを兼ねたり。 **起し、其縁にて** **あだなり** と云 **伊勢物語** に年頃おとづれざりし人櫻の盛に來りしかば主がよめる由詞書し「長き」と續く。 **あだなり** と云 **伊勢物語** に年頃おとづれざりし人櫻の盛に來りしかば主がよめる由詞書し程なく散るものなれば頼み難きものと誰にも思はれたれど、其櫻故に一年に逢ふか逢はぬ祥珍 **ま弓つき** らしき人をも待ち得たりとなり。この歌の作者を井筒の女と同一人としたるは例の筆法なり。 **ま弓つき** **弓** **伊勢物語** 「あづさ弓ま弓つき弓年を経てわがせしがことうるはしみせよ」の **直衣** 古代の公卿の **移り** 歌を引く。「年」は矢の早き意に續けたるにて、上二句は「年」の序に過ぎず。 **舞** 姿に似せおふせ **雪を廻らす** 舞容を賞し **月やあらぬ** 伊勢物語其他にいでたる業平の歌「月身にして」 **いつの頃ぞや** 「井筒」の語を起す。 **凋める花** 古今集の序に貫之が業平の歌を評しての色なくて句残れるが如しといへるを引き「残 **芭蕉葉** の云 芭蕉に關する夢の故事列子に出でたれども、りて在る」と云ひかけて「在原」の語につとく。 **芭蕉葉** の云 芭蕉に關する夢の故事列子に出でたれども、芭蕉の破るゝ

装束附

前シテ (里女)

面 深井若女小面の内、鬘、鬘帶、襟白二つ、着附箱、唐織着流、水晶珠數(但し杉桶に木の葉を入るゝ時は珠數無し)

後シテ (有常の女)
面 同前、初冠、卷纒追掛、襟白、着附摺箱、紫長絹花色地、白地にても、縫箱腰卷、胴箱腰帶、鬘扇。

ワキ (僧)

角帽子、着附無地熨斗目、水衣、緞子腰帶、扇、數珠。

三番目

井筒

九月

ワシキ

有常ノ女(前ハ里女) 僧

早白(シツカミ)

此の諸國一頁の僧である。わかれ此程の
 南都七堂ドオは集りてゐる。又これより初
 瀬セは集らざりて存い。これある寺を人
 は尋ねてゐる。在原寺ウラハラと申し程よ。
 立ち寄り一頁を思ひ(大キク)のカハ上(殊勝運ヨク)は
 此在原寺ウラハラの業平ノブヒラ紀ノリの有常アツツ子

井筒

の息女。ま。婦。位。女。給。ひ。一。石。の。上。に。あ。る。
 べ。風。吹。け。ば。沖。つ。白。浪。龍。田。山。と。詠。ど。
 け。ん。も。こ。の。所。ま。て。の。事。あ。ら。べ。ー
 昔。語。の。跡。訪。へ。ば。其。業。平。の。友。と。せ。し。
 紀。の。有。常。の。常。あ。ま。い。せ。妹。背。ち。あ。ひ。て。
 吊。り。ん。妹。背。ち。あ。ひ。て。あ。む。ら。し。ん。
 暁。毎。の。胸。伽。の。水。あ。ぢ。し。た。い。ら。の。胸。
 (拍子合) (優ニシツトリ) (下歌中) (シツカミ) (カテ) (拍子合)

伽。の。水。月。も。心。や。澄。ま。ま。ら。ん。
 きた。よ。物。の。寂。し。き。秋。の。夜。の。人。目。稀。
 ある。古。寺。の。庭。の。松。風。更。け。過。ぎ。た。目。も。
 傾。く。軒。端。の。草。忘。れ。て。過。ぎ。ら。う。
 へ。ち。忍。び。顔。ま。て。ら。ま。で。が。待。ら。事。
 あ。ら。あ。ら。ん。び。は。何。事。も。思。ひ。て。の。
 人。よ。残。る。世。の。中。あ。あ。唯。ら。う。と。
 (拍子合) (下歌中) (シツカミ) (カテ) (拍子合) (打切)

小談

かく一條の頼む佛の法華の宗道すま
 絵く法の聲上秋迷ちも照させ給ふ
 声照させ給ふ声響る打切りもも見
 えて有明の行く西の山あはれと眺み
 四方の秋の空の聲の文圃ゆらも
 嵐の吹くも音の響る何の
 音より響る何の音より響る

まー。あつた寺の音の響るも
 折る。あつた寺の音の響るも
 ち掬いあげ花水も。あつた寺の音の響るも
 向の氣色見え給ふ。あつた寺の音の響るも
 まーあつた寺の音の響るも
 者あり。此寺の本願在原の業平の母
 ちを響るも音の響るも

小談

一歩しては家の庭を歩かす。さあさあ
 毒へてはるかにさす。さあさあ
 歩路を歩かす。さあさあ
 業平のまじり。さあさあ
 さあさあ。さあさあ。さあさあ。
 昔語のさあさあ。さあさあ。さあさあ。
 さあさあ。さあさあ。さあさあ。さあさあ。

業平(カノエ)。さあさあ。さあさあ。さあさあ。
 業平(シヅカニ)。さあさあ。さあさあ。さあさあ。
 其時たのむ。昔思ひをさあさあ。さあさあ。
 さあさあ。さあさあ。さあさあ。さあさあ。
 さあさあ。さあさあ。さあさあ。さあさあ。
 さあさあ。さあさあ。さあさあ。さあさあ。
 さあさあ。さあさあ。さあさあ。さあさあ。
 さあさあ。さあさあ。さあさあ。さあさあ。

いまだ（ヤシ）傳えられたおちめ世話（物語）と語り、（地上）昔男の名が（柏子舎）あり、在原寺の跡ありて、（打切）松も老いたる塚の草。これこそそのよ
 うき跡の村を、まきの穂よ出づらん
 りの名残あるらん。草（おん）さして、（おん）露（おん）降ると古塚の真（おん）あるあまの

シテサシクセ (品位ヨクサラシ)

跡ありけりも（シキ）氣色あは跡ありけりも
 氣色あは。猶（健カミ）業平の侍事委
 く侍物語りゆへ（地クリ）昔在原の中將。
 年へてこころは石の上（打掛）ありの里も花
 の春。日の秋とて（拍子不合）白み給ひしよ
 其頃ハ紀の有常がむまめと契り。妹
 背の心淺からむしよ（地）又何内（五）の國

高安の里よ。知らずありてこの道よ。忍
 びて痛ひ給ひ。風吹けば沖つ
 白波龍田山。夜もや君がひとり
 ゆくらんとおぼしうあまのよるの道。
 行くを思ひてうきさびてよその契
 くれぐれあり。情知らうたかたの
 哀のべもことわりあり。昔此
地
打切

國よ。むす人のありけら。宿を並べて
 の前井筒よ。ありてうきあの子の友
 だも。語りひて。互は影を水鏡面を
 並べ袖をわけ。心の水も底ひなく移る
 月日も重なりて。おもとありく恥ぢがた
 しく。互は今ありけり。其後彼の
 まの男。言葉葉の露の玉。草の心の
井筒

花も色そひて
（優ニ引立テ）
 筒井筒井筒よか
 けーまろがたけ
（上、抑へし）（前ヨリ運ビテ）
 生ひひけらあ妹
 見えまよと詠みて贈りける程よ其
（上、抑へし）（前ヨリ運ビテ）
 時女もくらべごとありわけ髪も肩過
 きぬ君あらまじと誰らあぐさあまたが
 ひよ詠みぬ故あれ也筒井筒の女とも
 筒井の有常らむさあのおさあめあ

ドラ ロンギ上（氣ヲカハ心静ニ運ビテ）
 げよやありの物語聞けバ妙
 ある有様のあやも名のうおさあませ
（優ニ引立テ）
 まいあわれの恋衣紀の有常らむさあ
（上、抑へし）（前ヨリ運ビテ）
 ともいさ白浪の龍田山使をよ紛れて
地上
 来りたりあまぎやさそり龍田山
 色もそ出づるもみぢ葉の紀の有
 常らむさあめあも又井筒の女とも

地拍子
又地拍子
あつたれあつたれ
あつたれあつたれ

井筒

地(静ニシテ)

恥かしあらわれありと
志の縄のあがき夜を契り一年の筒
井筒井筒の陰は隠れけり井筒の
陰はかくれけり
更け行くや在原寺のよるの月在
原寺のよるの月昔は返き衣手は夢
待ちそへて假枕若の席は臥しはけり

早上歌(静ニ)
待謡(拍子合)

中入

若の席はあはけり
あはけり
あはけり

(兼カテ定ミナク)

後シテ上(調子高メテ品好クスラリ)

あはけり人待つ女もあはれあり
筒井筒の昔より真ら樹ら年を
て今あきせよ業平のあたまの
直衣身はあはれ恥かしや昔男よ

井筒

移り舞 雲を廻らも。花の袖 序之舞

●獨吟 仕舞

合方注意 句未けきノ節ノ 間ニ八拍子ヲ受ベテ 取ル

シテワカ上 (揚ヒヤカニ大キク)

月やあらぬ春や昔とあもりも。ら
の頃ぞや 井筒 井筒
井づゝあけ 井筒
よけりあ 井筒
老いよけりあ 井筒

地拍子 老いよけりあ 又特ニ拍子扱 老いよけりあ

×合方注意 此ヲ八ヲ聲ニテ引 カズ間合ノミ取ル

からみえり。昔男のあむり直衣ハ。
女も見えむ。男ありけり。業平の
面影 見ればあつかりや。あつから
あつかりや。婦魂の姿ハ調める。
花の色無くて白残りて在原の寺の
鐘もほのぐと。目くらんば古寺の松
風や芭蕉葉の夢も破れて醒めよ

三井寺
能之小書
謡ひ方梗概
シテ
ワキ
子

三井寺

解題 清水観音に祈りて別れたる母子の廻り合ひし事を、三井寺の鐘、中秋の明月、湖畔の風光等に結び合せて修辭麗しく作りたる曲なり。作の中心は其脚色に存せずして寧ろ景物より來る詩趣にあり。作者自らも恍惚として詩中の人となり、観音の利生を忘れて「鐘故に逢ふ夜なり」とのみ云へること興深しと見るべし。世阿彌の作と傳ふれども詳ならず。糺河原、粟田口兩勸進能に演せらる。

能之小書 能にても夢占の狂言出でずして素謡の時の如く謡ふ事あり。之を無俳之傳といふ。

謡ひ方梗概 本曲は謀(タバカリ)の物狂といひて狂女を装ふものなれば、狂態の裏面に尙幽玄の心なるべきものなり。

シテ 前は子を尋ねて佛に祈るものなれば、稍打ちしめりたる心を以て靜に謡ふべし。サシは此要領にて、靜なる内にも稍さらりと扱ひ、決して重々しくならぬやう心すべし。下歌は調子を更へて聊か緩め、上歌は餘り高めずしつとり謡ふ。此止めに睡眠の心有り。充分間を取りて次の詞より氣を起して謡ふ。後は三井寺に狂ひ來れる體なれば、「雪ならば」以下稍派手やかにさらりと謡ひ、漸次氣を掛くべし。「げに今宵は」の一節は月に興する心を清くさらりと謡ふ。「面白の鐘の音やな……」は一息おきて前よりも稍ゆるく心有りげに謡ふを宜しとす。ワキとの問答は氣を掛けて確りと受け渡し、鐘の段に入りて地との掛合稍ゆるめて纏り好く謡ふ。サシより狂氣を棄て、少しく靜に謡ひ行く。ウセ後の詞、掛合は氣を棄せてさらりめに謡ひ、「またわらはも……」をしつとり、「子故に迷ふ……」を氣を更へて辭句さながらの心に謡ふ。ロンギは穩にして然も喜びの心あるべし。

ワキ おしなべて健かに謡ふ。次第は素直に強み無く上歌は明かにあるべし。「桂はみのる」云々は確りと扱ひ、シテとの問答はシテを叱咤する心にて謡ふ。ワキツレは素謡にては一人、ワキに従うて謡ふが宜し。獨の詞は淀み無くさらりとあるべし。

子 調子を高くさらりと謡ふ。

地

「亂れ心や狂ふらん」はカケリの前なれば勢好く附け、「月見ぬ里に」以下節をたつぷりと誦みて運び好く矢張晴れやかなるべきものとす。鐘の段は「許し給へや」より更へてシテと好く合期するやうに力め、「爲樂と響きて」以下調子好く十分に誦ふべし。クワは健かにすらりと扱ひ、クセは上端前を靜に、しみじみとしたる情趣を誦ひ現し、上端後は前よりも稍引立て、ゆらりと誦ふを宜しとす。ロンギは素直に、キリは少しく運びて祝言の心に誦ひ納むべし。

辭解

南無 梵語。佛に向つて救済を請ふ意。大慈大悲 仁愛の廣大なる謂。觀世音は慈悲の權化なれば此語を冠す。觀世音 法華經普門品に其の音聲を觀じて皆解脱を得しむべしとあり。さしも草 新古今集に「なほ頼めしめじが原のさして其後に」此歌は清水觀音の御歌となむ云ひ傳へたる」と詞書あり。よりさしも畏き 是程一稱一念 南無觀世音菩薩と一度稱へ一枯れたる木に 云千手陀羅尼に、觀音の妙力によれば枯木にすら花逢はざる事あら

縁子 幼兒。枯木に對して若木といふやとなり。あらた たら 御合せ 夢合せを謝していへる凶判斷。諸本には狂言の詞省かれたれども、狂言夢を判じて其夢を祝ひ、「尋 二井寺 園城寺の通稱。三井は地名なり。園城寺 天智天皇(志賀に都し給ふ)の皇孫大友與多磨、天皇の遺願を繼ぎて講堂 七堂伽藍講問答又は經論を講述する堂舎。類なき名を望月 名を持つを望月にか

夕を急ぐ 早く暮れよと夕に雲を厭ふや 云まだ夜とならぬ前より日影を見ては雲の出づるを厭ひ明月といふ雪ならば幾度袖を拂はまし花の吹雪

志賀の山越えといふ古歌なるべし。志賀の山越えは歌林良材集に京都北白川の瀧の傍より登りて如意峯越しに志賀へ出づる道なりとあり。鳩照る 近江の湖の枕詞。茲は琵琶

上見ぬ 鷺の形容。鷺は雲上高く翔りて都の秋 古今集に「春霞立つを見すや

かなし 愛らし。白糸 知らぬと云ふを白糸に掛く。次 都の秋 古今集に「春霞立つを見すや

波 志賀一帯の地の古名。「や」を添へて志賀の枕詞に用ひ慣はしたり。志賀辛崎の 一つ松 志賀の里は今の南滋賀。辛崎は其

らるゝ名木。こゝには一つ松も、その色は縁子の縁に同じく殊には唯一つ立てる様のが子が似たれば、今は

厭はし 云今は秋なれば松吹く風をも厭はねども櫻の咲く頃ならば必づかひなるべしとの意にて櫻咲く春と

秋の水に續け、更に水の縁にて三井と云へり。桂はみのる 李嶠の月の詩に「柱生三五夕」。あこがれ 心引三

五夜中の 朗詠集にいでたる白樂天の詞句に「三五夜中新月色、二千里外故人心」。新月は新に出でた

の面に 拾遺集に「水の面に照る月並を數ふ。所から 鶏の湖が「水の面……」の歌に

波も粟津 波の淡く見ゆるを粟津に云

月は眞澄の鏡山 月は明かなる鏡の如く照り輝くとの意につけてかすか山田、矢橋 今の栗

二條攝政後普光園寺殿の連歌の發句に「月は山風ぞ時雨に鶏のうみ」とあり。古筑 波も粟津に云

波集に出づ。月は山上に照り風は時雨に似たりといふ。「似」を「鶏」に云ひ掛く。

山田、矢橋 今の栗

二條攝政後普光園寺殿の連歌の發句に「月は山風ぞ時雨に鶏のうみ」とあり。古筑 波も粟津に云

波集に出づ。月は山上に照り風は時雨に似たりといふ。「似」を「鶏」に云ひ掛く。

山田、矢橋 今の栗

二條攝政後普光園寺殿の連歌の發句に「月は山風ぞ時雨に鶏のうみ」とあり。古筑 波も粟津に云

波集に出づ。月は山上に照り風は時雨に似たりといふ。「似」を「鶏」に云ひ掛く。

山田、矢橋 今の栗

太郡山田村、矢橋は 駿河國興津町なる臨濟宗の名刹。弘 波や三井の 秀

同郡老上村の一部。清見寺 長元年明元禪師の開創にかゝる。龍女成佛 婆娑羅龍王の女八歳にして成佛 影

郷 三井寺の鐘は田原藤太秀郷が三上山の蜈蚣を退治せし事法華經提婆品に見ゆ。はさながら 月影は恰も霜夜の如く澄みたれば鐘 庚公 朗詠集に「夜登庚公之樓、月明千里」云ある

に樓に登りて月を賞し居たるを咎めざりし故事あり。之 或詩にいはいはく 團々は月のまごかなる貌。海

を引きて月に興じて鐘樓に登りしを云ひ開かん。之 雲衢は雲の巷即ち雲のむれなり。堯山堂外記に一僧あり、夜半時ならざるに鐘を撞きて滿城を驚かしたる

為斬られんとしたる時、僧、夜來月の詩を作りえたりと答へて釋されし事を記せり。其詩に「徐々東海出、漸々

上、天衢、此夜一輪滿、清光何處無」とあり。又江隣幾雜志には南唐の一詩僧秋月の詩を作り「此夜一輪滿」の句

を得たれども次句を得ず、翌年の中秋漸く「清光何處無」の句を得、嬉しさの餘り夜半寺鐘を撞き城人を驚かし

たるため捕はれしが此事を語 聖人 詩僧を 初夜、後夜 初夜は今の午後八時。後夜は今の午前四時。晨朝、入相 晨朝は今

りて釋されたりと記せり。 時。入相は今 諸行無常 涅槃經四句の偈の初句。一切萬物はすべて常住不變のものにあらずとの意。こ

の午後六時。 生滅法 四句の偈の第二句。生ある 生滅滅已 四句の偈の第三句。生も 寂滅爲樂 四句の偈の第四

に達すれば無爲寂滅の 眞樂を得べしとなり。 菩提の道 覺の 月も數添ひて 鐘を撞く數の重なる 百八煩惱 心身を惱

入の煩惱。寺院にて除夜の夜半より百八の鐘を 五障 女人は轉輪王、帝釋、魔王、佛の五と 眞如の月

撞くは百八煩惱を覺醒するに擬すといへり。 長樂の鐘の聲 朗詠集に出でたる李嬌の

眞は眞實、虛妄に非ざるを顯はし、如は如常、變易なきを表 詩句「長樂鐘聲花外盡、龍

はす。一切萬法の實體にして恒久不變なる眞理に月を喩ふ。 池柳色雨中深。長樂は秦の獻公の造りし長樂宮、龍池は唐の興 こと、にも 我國 言葉の林 和歌なり

慶宮にある池をいふ。武陵記に見えたる龍池に混するは非なり。 鐘をよめる例多しとの意を以てか 高砂 千載集に「高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけ 曇るか月も 夫

ねて高き名を聞くに類したり。 集に爲家の歌「はつせ山入相の鐘の こもりくの 枕詞。難波寺 大阪天王寺をいふ。同 山寺の

聲ばかりくもり残せる五月雨の空。 春 新古今集能因 妹背 契りたる きぬぐ 朝の別れに男女の 待つ宵に 新古今集にあ

いらく「おゆる」の延言「老ゆらく」の 涙心 夢も「無」きを涙 各衣を着ること。 待つ宵に 新古今集にあ

し鳥を鳥とし江楓を 蓬窓 苦を蔽ひ 楫枕、浮寝 船中に寝 ござめれ 「にこそある 張繼の楓橋夜泊

江村と更へたり。 面伏 不面 はづかし 我と我姿の恥かしき意を名所の羽束師の森 常の契 男女の契

に賣る人盗人。 の鐘を別の鏡と詠せし例多し。

装束附

前シテ (母)

面深井、鬘、無紅鬘帶、襟淺黃又は白、着附箱(黃、茶地の類)、無色厚板又は小格子の類或は無色唐織に

も、水晶の珠數。 後シテ (狂女)

面深井、鬘、鬘帶、襟淺黃、着附摺箱、水衣、無色縫箱腰卷、無色縫腰帶、狂女扇、篋。

子方 (千満丸)

襟赤、着附縫箔、兒袴、縫腰帶、黒骨爪紅扇。

ワキ (園城寺住僧)

角帽子、着附小格子、白大口、水衣、縫紋腰帶、扇、珠數、

ワキツレ (僧)

角帽子、着附無地鬘斗目、白大口、縷水衣、縫紋腰帶、扇、珠數、

四番目
畧三番

三井寺

八月

子方 千満丸
住僧 園城寺
同 從者
ワキツレ 狂言者

シテサシ上 (シツトリ)
ヨワク (拍子不合)

南無や大慈大悲の觀也音さ
も草さーもかーこまお言の末一稱
一念猶頼あり。まーてや此程日や送り。
夜や重ねたる頼の末。あどら其あひあり
らんと。思ひ心ぞ哀ある
思ひ子の行く末何とありぬらんゆく末

四洋次第上(素直ニ池ニナク)

(三人)
ツヨク
(拍子合)

秋もあざのくし待ちて。秋も半のくれ
まちて。日よこらちや急ぐらん

(半拍)
(健カミ)

江州園城寺の信僧も。又こゝよ

わたりの稚き人。愚僧を頼む由仰

せの向。力なく師弟の契約を。あ

申して。又今夜は。自十夜。明日

あての程よ。ちのあまを伴ひ申し。

皆と講堂の庭よ。出で。月を眺め

を。やと存の類あま。名を望月の

今宵とて。名を望月の。今宵とて。夕

べや急ぐ人心。知るも知らぬも。諸共よ。

雲を厭や。あねて。あり。月の名頼む。

日影。あ。月の名。たのむ。日影。あ。

雪。あ。ら。幾度。袖を。拂。ま。り。花の。吹。雪。

後シテ
一声
ヨウク
(拍子合)

(稍波時ヤカニススリ)

(前ヨリ運)

四洋上歌
(朗カニ運)
(三人)
(拍子合)

打切

打切

打切

と詠^{エト}けん志^シ賀^カの山^{ヤマ}越^コえうち^{ウチ}過^カ
 ぎて^{ナガメ}眺^{トク}の末^{マタ}みづうみ^{ミヅウミ}の鳩^{トビ}照^テる比^ヒ叡^エの
 山^{ヤマ}高^{タカ}みよ見^ミぬ就^ツ鳥^{トリ}のお山^{ヤマ}とやらんを
 今日^{コノヒ}の前^{マエ}は^ハ採^{ツク}む事^{コト}よあ^アらあ^アり^リがた
 の事^{コト}や^ヤあ^アらあ^アり^リ顔^{ガオ}あ^アれ^レども
 あれ^レ物^{モノ}よ^ヨね^ネぶ^ブよの^ノあ^アらあ^アり^リ顔^{ガオ}あ^アれ^レども
 理^{コトワリ}あり^リあ^アの^ノ鳥^{トリ}類^{レイ}や^ヤ畜^{シヨク}類^{レイ}だ^ダよ^ヨも^モ親^{オヤ}子^コ

小謡

のあ^アを^オれ^レ知^チる^ルぞ^ゾあ^アま^マし^シて^テや^ヤ人^{ヒト}の
 親^{オヤ}と^トい^イは^ハし^シと^トほ^ホあ^アと^ト育^{ソダ}て^テる
 子^コの^ノ行^{ユク}く^クち^チも^モ白^{シラ}糸^{イト}の^ノ乱^{マシ}れ^レ心^{ココロ}や^ヤ狂^{キヤウ}
 ぶ^フらん^{ラン}都^トの^ノ秋^{アキ}を^ヲ捨^{スツ}て^テ行^{ユク}ぞ
 目^メ見^ミぬ^ヌ里^リよ^ヨ住^ヰみ^ミや^ヤ習^{ナラ}へ^ヘる^ルさ^サと^ト人^{ヒト}
 の^ノ笑^{ワラ}め^メの^ノ花^{ハナ}も^モ紅^{ベニ}葉^{エフ}も^モ月^{ツキ}も^モ雲^{クモ}も
 古^コ里^リよ^ヨ我^ワら^ラ子^コの^ノあ^アら^アら^アる^ル田^タ舎^{シャ}も^モ住^ヰみ^ミ

よあそびべーし侍かき里フルサトの帰らん中いざさ里
 の帰らん中帰れがさし浪ハシや志賀幸崎オクリエカラサキ
 のつつねみどり子のたぐひ調子ヨクあらばカ松マツ
 風よこしカゼト向せんマツカハラ松風もマツカゼ今イマ厭イタをト櫻ウツ
 さくイコトウ春ハルからる花園ハナヅミの里サトも早くイハまき
 向吹くムカフ風カゼ凄サマシき秋アキの水ミヅの三井寺サンヰジよ
 著ツキきよけりイ三井寺サンヰジよ早くイハまきよけりイ!

小謠

ワヤかん上(健カニ)
 ツヨク
 (拍子不合)

桂カヅラハ女のメノるル三五三五の暮ク名高ナカき月ツキよ
 あアがれてレ庭ニワの本ノ蔭カゲよヤ休ヤスらエむム

シテ
 (流ニナクサラリ)

けケよヨくク今イマ宵ヨイハ三五三五夜ヤ中ナカの新シン月ゲツの色イロ

二千里ニセンリの外ホカの故コ人トの心ココロ水ミヅの面オモよモ照アるル

月ツキあアみミやヤあアぞゾあアれレババ杖ツヅミもモ最モト中ナカ夜ヤもモ

あアらラむム所トコロからカラさサくク面オモ白シロやヤ月ツキハ山ヤマ

風カゼぞゾ時トキ雨アメよヨ鳩トビの海ウミ風カゼぞゾ時トキ雨アメよヨ鳩トビ

早稻 (カンワテ)

やあ〜暫らくお人の身もて付きて

鐘やぶ撞くぞきつでのかきく シテ (前ヲ受ケテ)

度公ら樓よ登りも目の詠せー鐘 シテ (前ヲ受ケテ)

の音あり許さーあ 早 (南立タヌヤウ池ニナク)

人の詞お人の身もて鐘撞くか

いゝ思ひもさるあ書もしおのさる

今書の日も鐘撞く事お人あ

厭ひ給ひそ或詩よ白く ツヨク中 (流ニナク) 團こも

海嶠を離れ ツヨク 漸く ツヨク 雲衢を出る (袖ナク)

此後句あり シテ (前ヲ受ケテ) 明日は向て心を

登まじと 中 (書ナク直ニシカ) 今宵一輪満てり ツヨク 清光何

れの所よ シテ (前ヲ受ケテ) あり ツヨク 空句を ツヨク まつ ツヨク けて

あまりの楼一 ツヨク ねも ツヨク け ツヨク 高樓よ

登りて ツヨク 鐘を ツヨク 撞く ツヨク 人 ツヨク づ ツヨク ね ツヨク ね ツヨク ね

●鐘の独吟仕舞

三井寺

これに詩を答ふ。かほりの聖人か

り。だも。目よ。乱る。心あり。まて。や

拙き。粗女。あ。れ。が。許。し。給。へ。や。人。と。よ。

煩悩の。夢。を。覺。ま。ま。や。法。の。聲。も。静

ま。ま。づ。初。夜。の。鐘。を。撞。く。時。ハ。諸。行

無。常。と。響。音。く。あ。り。後。夜。の。鐘。を。撞

く。時。ハ。是。生。滅。法。と。響。音。く。あ。り

(漸次ニカッテ)

カレ。中。シ。カ。リ。運。ミ。テ。

地。中。カ。テ。健。カ。リ。引。立。テ。

地。ヨ。ク。

地。心。持。シ。テ。ユ。ル。

地。池。ニ。ナ。ク。引。立。テ。

地。上。エ。ル。メ。テ。タ。ツ。ア。リ。ト。

地。上。

地。カ。シ。ク。

地。朗。カ。シ。

地。上。

地。上。氣。ヲ。カ。ケ。テ。運。ミ。

拍子投
寂滅

晨朝の響音ハ。生滅滅已。入相ハ

寂滅。為。樂。と。響。音。き。て。菩提の道

の鐘の聲。目も。數。添。ひ。て。百。煩。悩。の

眠の。驚。く。夢。の。世。の。迷。も。は。や。撞。き

たり。や。後。夜。の。鐘。も。あ。れ。も。五。障。の

雲。晴。れ。て。眞。如。の。日。の。影。を。眺。め。居。り。て。明。か。さ。ん。そ。の。長。樂。の。鐘。の。聲。ハ。

三井寺

●獨吟サシクセ

地 花の郊ホカのきぬシテ又シテ龍池リウチの柳ヤナギの色イロハ
 雨アメのうウちチはハ深コ一ト 其外シテこコもモ
 代ヨのノ人ヒト言コト葉ハのノ杖ツチのノかカねネてテ聞クく
 地静ニスラリ 名ナもモ高タカ砂スナのノ尾ビのノ鐘カネ時トキかカけてケ秋アキ
 の霜シロ曇クモるル月ツキもモこコもモりリくクのノ初ハツ瀬セもモ
 遠トホ難ナはハ寺テ名ナどトこコろロ多タきキ鐘カネのノ音ネ
 地漸次ニシツル 盡ツキきキぬヌやヤ法ホフのノ聲コエあアらラんン
 山ヤマ寺テのノ

春ハルのノ夕ユフ暮ク來キてテ見ミぬヌババ入イ相サウのノ鐘カネよヨ
 花ハナをヲ散チりリけケるルけケはハ惜シめメのノもモあアとト夢ユメ
 の春ハルと暮クれぬヌらんン其外シテ曉アカツキのノ妹イモ持ヂ
 ちチ惜シむムきキぬヌぐグのノ恨ウラミをヲさサるル行イくク
 小コもモ枕マクラのノ鐘カネや響ヒビくクらんン又マタ待マつツ音ネよヨ
 更マけケ行イくク鐘カネのノ聲コエきキけケババ能アかカぬヌ別ワれのノ
 鳥トリのノ物モノうウらラとト詠ウタササもモ窓マダ路ヂのノ便ヱのノ音ネ

づゝの聲と聞くものぢ。又の老らくの。
 寝覺ほとあるさへ。今おもひねの。
 夢だよも涙のさみさよ。此鐘の。
 つくづくと思や盡さ。曉をらうの時。
 づらばま。日落ち鳥啼して。
 霜天は満ちて。凄まじくは村の漁火。
 もほのぢよ半夜の鐘の郷音。客の船。

地拍子
 客の船よ
 又拍子扱
 船よ

夜まじら。

道よらん。蓬窓雨滴りて。駈れ。
 路の楫杖。らまねぞ。雲の海。浪。
 風も静めて。秋の夜まじら。目まむ。三井。
 寺の鐘と。あむら。子(調子高クサラリ)。
 事の。何事。の。子(サラリ)。
 物狂の國里。ち。同。り。て。餘。り。入。り。て。早。
 思ひ。よ。ら。ぬ。事。を。承。る。も。の。あ。ら。う。か。つ。

三十一

あら易^{ヤス}か^カ同^{ドウ}の事^{コト}尋^{タズ}ねて^テは^ハあら

せ^シか^カら^ラい^イじ^ジ。^(氣ヲ更ヘテシツカリ)お^オ女^メお^オこ

この國^{クニ}里^{サト}ら^ラら^ラく^クの者^{モノ}も^モあ^アら^ラぞ

シテ^(何氣ナクスラリ)こ^コの^ノ駁^{バク}河^カの^ノ國^{クニ}清^{キヨ}見^ミが^ガ開^{カイ}の^ノ者^{モノ}も^モあ^アら^ラ。

子^コカ^カん^ン上^ノ。^(カハツテサラリ)何^{ナニ}の^ノ清^{キヨ}見^ミが^ガ開^{カイ}の^ノ者^{モノ}と^ト申^{マウ}ら^ラり^リ。あ^アら^ラ。

不思議^{フシギ}や。今^{イマ}の^ノ物^{モノ}行^{ユク}せ^セら^ラれ^レし^シの^ノ心^{ココロ}。

我^ワが^ガ子^コの^ノ千^チ滿^{マン}殿^{テン}い^イか^カぬ^ヌい^イあ^アら^ラ珍^メ。

や^ヤば^バ 暫^{シブ}ら^ラく^ク。^(角立タマヤウシツカリ)お^オ女^メの^ノ唐^{カラ}忽^{コト}

ある^{アル}事^{コト}を^ヲ申^{マウ}ま^マ者^{モノ}あ^アら^ラぬ^ヌい^イあ^アら^ラぬ^ヌ。

ま^マの^ノ物^{モノ}よ^ヨね^ネま^マぬ^ヌ物^{モノ}を^ヲ。

物^{モノ}よ^ヨね^ネも^モ別^{ワケ}か^カら^ラぬ^ヌ時^{トキ}何^{ナニ}の^ノ物^{モノ}。

い^イじ^ジか^カら^ラい^イじ^ジま^マち^チー^ニ我^ワが^ガも^モあ^アら^ラぬ^ヌ。

早^{ハヤ}ッ^ツ行^{ユク}。^(荒クズカリト)か^カら^ラい^イじ^ジを^ヲ我^ワが^ガ子^コも^モ申^{マウ}ま^マら^ラ條^{ジョウ}あ^アら^ラぬ^ヌ事^{コト}を^ヲ。

申^{マウ}ま^マら^ラぬ^ヌい^イじ^ジの^ノ心^{ココロ}。あ^アら^ラぬ^ヌい^イじ^ジ。

シテ上(穩カニ調子ヨク)

嬉シテ上あつらも哀オドロの涙ナミのさきサキが恥チ
 のもりて餘アれる涙ナミあサげサひヒ
 難バシき親オヤと子コの縁ヰハ盡ツきせぬ契チとて
シテ日ヒこそ多タきさサふフ宵ヨイもモ此コ三井寺サンノイ
 二廻ニマりリきて親オヤ子コ逢アはハ何ナニ故コトぞゾ
 この鐘カネの聲コエたタて物モノ粗コのあるアルぞとて
 お咎オトガめありアリ故コトあアるル常トコの契チよヨ別ワ

●小論

の鐘カネと厭イひヒ親オヤ子コのたタめの契チよヨ
 鐘カネゆユゑエ逢アはハ夜ヨあり嬉シき鐘カネの聲コエ
不引あアかカとト伴トモひヒまマちチ帰キりリかカとト
 伴トモひヒまマちチ帰キりリ親オヤ子コの契チつツきキせセぎギもモ
 富トク貴キの家イとありアリまマけケりリげゲはハありアリがガ
 たタきキ孝コウ行コウの威イ徳トクぞゾめメでデたタかりカりリけるケル
 威イ徳トクぞゾめメでデたタかりカりリけるケル

天鼓

解題

天より下りたる鼓を中心として樂器に關する一條の秘説を作りなしたる曲なり。されども此曲の典據と見らるべき無し。惟ふに創案の作なるべし。後世世阿彌の作と傳ふれども申樂談儀に此曲名見えず。記録の古きものは禪風習道目錄に曲名を記せると、親元日記に寛正六年三月九日音阿彌が勤めたることなり。文中に一條兼良の鴉鷲軍物語と符合せる詞あり。或は兼良の作文金春禪竹の作曲に成りしものか。

能之小書

常型ならざる能に弄鼓之舞と稱する式あり。此小書を附して演ずる時はワキの名告以下の詞濟みて直に案内の詞となり。此間シテの一聲、サシ、下歌、上歌を抜き、シテは誰にて渡り候ぞ」と謠ひながら幕を出づ。以下終りまで謠に變りなきも、後段太鼓ありて(常には太鼓無し)後シテの出は出端となり、樂其他の形に異なる所あり。

謠ひ方梗概

シテ

前は老父にて、一聲以下述懐なれば、しつとりと沈みて謠ふべし。「露の世に」の出は抑へて靜に寂しく、サシは聊ばかり運びを附け、下歌にて更へ、上歌は調子高くならぬやうしつとりと謠ひ、總て老

衰の身の頼り無き心の痛々しきさまを謠ふべし。ワキとの問答、初の程は普通に謠ひ、「いや／＼これも心得たり」と心持を更へ、以下參内の決意を陳ぶる處靜にして確り謠ふを要す。「たとひ罪には沈むとも」は上歌なれば調子を改め、聊か氣を掛けて出づ。ワキとの掛合は内裏に參りたる所なれば、前の問答とは心持を別にして一層鄭重にあるべし。「さては辭すともかなふまじ」は茲より思ひ切りたる如き語氣にて抑へて確りと謠ふ。サシ以下はさらりめに扱へど矢張り靜なる心なり。ロンギは救命を畏みて愈鼓に向ふ處なれば前の如くに沈まず抑へたる中にも氣を起して然も靜に稍訝え／＼とあるべし。中入前の詞は丁寧に落著き好く謠ふ。後は天鼓の亡靈なれば若やかに然も力有るべし。「あらありがたの」の出はサシの調子にて確りと謠ふうちにも運びはすらしとあり、沈むべからず、さりどて又御前の事なれば調子荒くなるべからず。ワキとの掛合は心中曇り無き様にて晴れ／＼に健かあるべし。

ワキ

大臣ワキなれば常よりは位を取り氣高き心にて謠ひ、シテ出で、よりは位を譲りてさらりめなるが宜し。

地

初の「たとひ罪には沈むとも」はシテの氣を承けて出づ。地次第は離れて靜に大きく謠ふが宜し。クリは前よりも稍引立て、謠ひ、以下位少しく進む。クセは靜に引締めて延びぬやう注意を要す。ロンキは氣を一轉して稍活々と輕めに扱ひ、「老の歩みも……」以下は一曲中の謠ひ所にて辭句に従ひ心持あれば充分に氣を入れて謠ふべし。後は「打ち鳴らす」云々を稍確りとして然もゆるやかに氣を乗せて謠ひ、「面白や時もげに」以下爽かに乗合ひ好く謠ふべし。

辭解

後漢の帝

後漢は我が紀元六百八十餘年より紀元八百七十餘年まで存続し、帝位を更ふること十二度に及びたり。爰に帝名を云はざるは大凡の時を定めて作りたればなるべし。

王伯王母

典據審ならざれども、王母は女仙の名なる故、之に對せしむる爲め王伯と作りしも。天鼓 那

にては、星、仙界の鼓、雷、又は雷に似たるもの等の稱なれど、佛教にては初利天にある鼓、或は諸天の伎樂器の總稱として使用し、之に怨來、怨去、愛欲、生厭の四種の聲ありて叩かざるに能く微妙の音を發すと傳へたり。是等の説の醇化せられて此には妙音を

房殿、雲龍閣

阿房殿は秦始皇が渭南上林苑に造りし宮殿を時人が呼びたる名。其結構壯大、華麗を極め漢よりも以前の事なれども、時代に頓著なく此に用ひたり。雲龍閣は典據なし。雲の龍に駕せるが如き高壯なる閣の謂なるべし。或は秦二世が造りし凌雲閣を思ひ誤りて作者取りいれたるものか。露の世

呂水

呂水の語佩文韻府にも無し。惟ふに樂音呂律の呂(陰)の聲、字を直に江河の名として作りたるなるべし。阿

に云、人世の脆く果敢無きを露に譬へ、餘命知れたる身の尙いつまで生きながらへんとて此年の秋も死なで殘るを作りかへ

孔子は鯉魚に別れ

孔子に伯魚といふ子あり。其生れし時魯の昭公鯉魚を贈りたれば孔子之を榮として其子を「鯉」と名づけたる由、孔子家語に見ゆ。

されば子の名は「鯉」のみにて足るべきを伯魚の魚を添へて茲に名とせり。伯魚は孔子の六十九歳の時五十にて孔子に先だちたれば「思ひの火を胸にたき」と追憶する情を思ひやりたるなり。白居易は

子を先だて

白居易、字は樂天、唐代の人、晩年詩酒に耽りて名顯れたり。其文集は我平安朝の文藝には白居易愛兒を喪ひて悲の餘り「病中哭金鑿子」と題する詩を作りたる中に愛兒の飲みさしたる藥の未だ枕邊に残れるを悲しむ心を述べ「殘藥尙頭邊」と云へるを引く。唐代は後漢以後なれば時代こゝにも錯誤せり。

仁義禮智信の祖師、文道の大祖

仁義禮智信は五常と稱して人のふむべき道。孔子の遺教を慕りて最も崇拜せられたれば此

に「世の中が悲しとなり」「なき」を暗に愛兒の亡きに掛く。玉葉集

「たえぬ袖の上かな」とあるを引き「思ひね」に云

「思ひね」は或る事を思ひつゝ寝る事。闇の現

にして云へる。忘れんと思ふ心こそ

なるべし。命のみこそ

に契りや 心得たり

罪に坐す事なれども天鼓を「呂水の江に

ゆふ月の上に輝く玉殿に

夕月は低きものなれば之に雲上の語意を交へて云へるなり。生きてある身は「久方の」は天の枕詞。生き存へたる身の年久しく思ふ意を以て「久」と云ひかけ「久方」の序とす。

其積礫に 和漢朗詠集に「既其積礫不窺玉淵者未之知驪龍之所蟠也」とあるを引く。句の意は、野人の九重の雲深き所を測り知らざるに譬ふ。 **世々毎の假の親子** 佛説に親子は一世の契にて前世後世の縁無しとしたれば假といへるなり。 **輪廻の波** 佛教衆生が六道に旋轉して生死極りなきこと車輪の廻り廻れるが如きを輪廻といふ。こゝにはこれを波に譬へて云へるなり。 **生々世々** 生れかはり死にかはれる過去、現過去の世、未來の世。又過去より更に更に未來の世。 **翅** 鳥をさし **佛性同體** 涅槃經に「一切衆生悉有佛性」とあり。佛教にては人悉く佛に到り得るの機なかるべしとなり。 **親子は三界の首柳** 偈諺を引く。親は子の爲、子は親の爲、有漏首に掛くる柳にたぐへたる諺。 **草衣** 粗末なる衣。しをると云ひて草に續け、 **唯命なれや** 恨みてもかありて罪に沈むは命有る爲なりといひて、 **鼓** 古は漏刻と稱し、水の漏洩する量によりて時の移るを打たさるゝを罪の責のごとく綴れるなり。 **時の鼓** を知り、鼓及鐘を打ちて時を報じたり。此鼓を時の鼓といふ。鼓を打つを **薄水を踏む** 詩經に「戰々兢々、如臨深淵、如履薄水」と。 **管絃講** 管絃を奏して **糸竹呂律** 糸絃、竹は管。呂律は音樂の調子、低き聲、高き聲。 **三伏の夏** 和漢朗詠集に「池冷水無三伏夏、松高風有一聲秋」と。 **月宮の昔** 前に「夕月かゞやく」とあるによせて月宮を出す。 **龍城録に開元六年八月望夜玄宗皇帝が天上の月中に遊びたる事を記し「有素娥十餘人往來舞笑於廣陵大樹之下、又聽音樂清麗、上皇因作霓裳羽衣舞曲」とあり。月宮の昔とは之を云へるなるべし。 **より****

引く

波のよりにては引く音を糸竹の樂音にかく。ひくは糸の縁語。 **秋風樂** 唐樂の曲名。唯秋風の意に用ふ。 **星も相逢ふ** 七月七日の夜。此夜牽牛、織女の兩星相逢ふ

と云へ **烏鵲の橋** 七夕の夜、鵲が二星を渡す爲天の川に架くる橋なる由、淮南子に出づ。紅葉を敷くといふ傳に云ふ。烏鵲の橋のほとりに紅羽を敷き、二星の屋形の前に風冷々たり」とあれど原書覺束なし。 **夜半樂** 唐樂の曲名。唯夜半の意に用ふ。 **人間の水は** 人間を水に譬へ低きに就く意を南に流るゝのごとく云へるにや。たんだく而衆星共之之。 **五更の一點** 昔は一夜を分ちて五夜と爲し、之を更といふ。五更は最終の更、即ち今の午とあるに依る。 **八聲** 鶏は曉を告ぐるまでに八度鳴くといふによりかく云へり。 **數は六つ** 時の鼓の數六を打つは即ち今の午前六鐘一點を撃ちし事支那の古制なり。 **語を連鎖として「巷の聲」とつゞけたり。巷の聲とは夜明けて巷の漸く賑しくなるを云へるなり。**

裝束附

前シテ (天鼓の父) **後シテ** (天鼓) **面阿古父尉** 又は小牛尉、尉髮、襟淺黃、着附無地熨斗目小格子目引厚板にも、註水衣、緞子腰帶、尉扇。 **面慈童** 又は童子、黒頭、黒地金緞鉢卷、襟白赤、着附縫箔(法被の時は唐織)唐織壺折又は法被、半切、縫紋腰帶、童扇(法被の時は唐團扇)。

ワキ (敎使) **着段附厚板、白大口、法被又は側次、紋附腰帶、扇。**

四番目

天鼓

七月

前シテ天鼓の父後シテ天鼓
ワキキ教使

ワキキ(健カニ流シナク)

此の唐土後漢の帝は使へ奉る臣下
 あり。諸も此國の傍は王伯王母とて
 夫婦の者あり。かの者一人の子を持つ。
 其名を天鼓と名づく。彼を天鼓と名づく
 くるこゝろ。彼が母夢の中は天鼓あり。この
 鼓あり。胎内は宿と見えて出生

一たびはひかへてしるす。其名をいひて鼓の音
 づく。其後天より眞の鼓あつたり。
 打てば其聲妙なりて。聞く人感^{カシ}を催^{モヨオ}
 せり。此由帝聞^キて。鼓を内裏^{ウチリ}の
 君より取りて。天鼓深く惜^{オシ}み。鼓を抱^イき
 山中^{ヤマナカ}に隠^カれぬ。然るにうづく^{ウヅク}地^チ
 あらむ。官人^{クワンニン}を以^モつて搜^サへ出^デたり。

催^{モヨオ}せり
トモ

天鼓

天鼓をぶらり水^{ミヅ}のほとけの鼓をぶらり内裏^{ウチリ}
 の方殿^{ホウテン}雲龍^{ウンリウ}のまゝ置^{オキ}置^{オキ}か
 れる。又其後彼の鼓を打たせらるれ
 ども更^{マシ}の鳴^ナる事^{コト}あり。さうあるの別^{ワケ}
 ち歎^{ナガメ}き鳴^ナらぬと思^{オモ}へる。向^{ムカ}彼の
 者の父王伯^{フウシヤク}を召^メして打たせよとの宣^{ノリ}
 旨^シを任せ^{マカ}。唯^タ今^{イマ}早^{ハヤ}伯^{ヤク}が私^シ宅^{タク}へ^(大キク)来^キる

天鼓

かん上 (兼ヲカヘテシツカリ)

ウシナワ

ハト

れ。が。重。ね。て。ま。た。い。ん。為。ま。て。ど。あ。る。
(拍子不台)
 ら。い。よ。く。そ。の。も。カ。あ。我。が。子。の
 為。ま。ま。い。ん。が。い。ん。と。そ。の。老。の。理。あ。れ。
 あ。ら。歎。く。ま。や。頓。て。来。り。い。べ。
早かん上 (引立テスライ)
 り。や。く。ま。あ。ま。の。言。旨。あ。ら。ま。唯。と。鼓。を
 打。た。せ。ん。の。其。為。が。あ。り。の。救。済。あ。り。
シテ上段 (聊ウ氣ヲカケテ)
 急。い。で。来。り。給。い。べ。な。と。い。罪。よ。い。
カ(テ) (拍子不台)

地 (前ヲ受テテ静ニ運シテ)

沈。む。も。い。ん。罪。よ。い。沈。む。も。
打切 ヨセルイ
 又。ハ。罪。よ。い。沈。ま。ぎ。も。い。ん。ま。あ。ら。我。が
 子。の。お。た。み。帝。を。押。み。ま。あ。ら。せ。ん。
ウシナワ
 帝。を。押。み。ま。あ。ら。せ。ん。急。ぐ。向。程。あ。く
ダイ
 内。裏。ま。て。あ。る。ぞ。と。あ。た。へ。来。り。い。ん
シテ (内ハトツテ 丁寧ニ)
 救。済。ま。て。い。程。よ。こ。い。ま。で。い。来。り。て。い。ん
中のツマシヤカニ
 とも。老。人。が。事。を。い。は。免。あ。る。べ。く。い。
ツヨクオジン
(拍子不台)

早約(健カニ角立タヌヤウ)

申(コトワリ)も所(コトワリ)の理(コトワリ)あていぬ。さし鼓(コトワリ)を仕(コトワリ)へく。

鳴(コトワリ)らぎてバカ(コトワリ)を事(コトワリ)急(コトワリ)して仕(コトワリ)へく

シテ(押テ確リ)さして辞(シジ)をももぢあまま。較(オオ)も應(オオ)

して打(コトワリ)つ鼓(コトワリ)の聲(コトワリ)も一(コトワリ)出(コトワリ)でバカ(コトワリ)と

その我(コトワリ)が子(コトワリ)のかたみとらひ月(ツキ)の身(ミ)よ

輝(カ)く玉(タマ)殿(ノミヤ)よ。始(ハジ)めて臨(リン)む老(ロウ)の身(ミ)の

地(チ)次第(ジヤイ)上(ウエ)、(静ニニタツツリ)生(ナ)きてある身(ミ)の久(キウ)方(ホウ)の生(ナ)きてある

身(ミ)の久(キウ)方(ホウ)の天(テン)の鼓(コ)を打(ウチ)たりよその(拍子合)

贅(ズイ)磔(セツ)よあらつて玉(タマ)脚(ノシ)を親(オヤ)をさるる。

驪(リ)音(オン)の幡(フタ)ある所(トコロ)を知らざるあり

シテサシ上(シツリトシツリト)げよやせと毎(マ)の假(カ)の親(オヤ)子(コ)よまを

●獨吟クセ留テ(前ヲ受ケテ)愛(アイ)別(ワカ)離(ワカ)苦(ク)の思(オモ)深(フカ)く恨(ウラミ)も一(ヒト)か入(イ)

や恨(ウラミ)み悲(カミ)むまも身(ミ)をさるる

わしと心の闇(ヤミ)ふかく輪(リン)廻(マ)のぼよた

存ド。まづく老人の私宅よ。帰りのいへ
シテ (ツマシヤカシ)
▲能ノ時ハ諸ハズ
あらありがたやい。さらば老人の私宅

又帰りのいへー 中入

ワカレ上 (淀ミナク確リ)
諸も天鼓が身やほり。呂水の堤よ
ツヨク (拍子不合)

は幸あつて。同く天の鼓をまゑ
上歌 (健カミ引立テ)

待謠 (拍子合)
京竹呂律の聲よ。京竹呂律の

聲よ。法事をあつてあまの御守

いぞありがたまき。頃ハ初秋の空あれば
中 (打切)

はや三伏の夏たけ。風一聲の秋の空
イウヅキ 中 (エツタリト大キク)

夕月の色も照りそひて水溜と
中 (拍子不合)

して。波悠たたり。あらありがたの
後 (シテ五五) (若ヤカニ晴タトシツカリ)

伊弉ひやあ。較を替ま。天四割よて
コト

呂水よはみ。身ありあ。後の世
コト

までも苦みの海ははみ浪は打たれて。

可^カ責^{シヤク}の責^セも隙^ヒありし^シ思^{オモ}ひの^ヒ
 外^{ホカ}の吊^ヒひよ^コら^ハあ^ハみ^コ出^ツで^タる^ト水^{ミヅ}
 の^{ウエ}上^ノ昇^ノ雲^ノら^ハぬ^ハ代^ノの^アあ^ハり^ガた^カら^ニ
 外^{ホカ}も^モあ^ハは^ハや^ハ更^クけ^ル過^ルる^ハ水^ノの^{オモ}面^ノよ^ク
 け^レた^シ人^ノの^ミ見^タえ^タら^ハい^ハあ^ハる^者ぞ^ト
 名^ナを^ナの^レし^テい^ハつ^テ天^ノ鼓^ヲと^ト雷^ヲあ^ハら^ウ
 吊^ヒひの^オあ^ハり^ガた^カら^ニい^ハつ^テ思^ハひ^{アラ}フ

ワキカニ上(健カニサナリ)

シテ和(角立タマヤウシツカリ)

ボオレイ

オントムラ

アラフ

ワキカニ上(サナリ)

美^ミたり^シ天^ノ鼓^ヲと^ト雷^ヲあ^ハら^ウ
 然^シら^ハら^ハ音^ノ樂^ノの^オ舞^ノ樂^ノも^ガ天^ノ鼓^ヲ
 手^タ向^ムの^ケ鼓^ヲ打^ツて^テ其^ノ聲^ヲ出^スつ^テあ^ハら^ハん^ト
 げ^レも^モ天^ノ鼓^ヲと^ト雷^ヲあ^ハら^ハい^ハく^ト鼓^ヲ
 ち^ハは^レ嬉^シや^ハさ^レる^ハ較^シて^モ自^ラ
 外^{ホカ}や^ハく^モ屋^ノの^オあ^ハり^ガた^カら^ニ玉^ノの^オ笛^ノの^オ音^ヲ
 聲^ノ澄^ミみ^テ月^ノ宮^ノの^オ昔^ノも^オあ^ハら^ハい^ハと

カニ上(サナリ)

スツア

ワキカニ上(サナリ)

シテ和(朗カニ)

ツカ

天鼓

ト

天鼓

(健カニ晴カト)

舞入
ア
マ
ク
ク
活
カ
ト

天の鼓も影向もさよ

天降りまき氣色も同じく打つ

あり天の鼓地上歌 (シメテ確リ)打ち鳴も其聲の(拍子合)

うち鳴も其聲の。呂水の波は流ると

打つありらありけの聲の。よりり

く系竹の手向の舞樂ありがたやシテ中(朗カシ)面白や時もげよ打上

仕舞
独吟
切子

地中(急カク)

面白や時もげよ

地拍子

又
前ノ風

前ノ風

人回の水ハ

秋風樂ありや松の聲。柳葉を拂

て日も涼く星も相逢よ空ありや

鳥鵲の橋のもよ紅葉を敷きこ

星の館の前は風冷く夜も更けて

夜半樂よもはやありぬ人向の水は南

星の北またんだくの天の海づら雲の

浪立ち添よや。呂水の堤の目よ

地拍子
雲の浪たち

天鼓

ト

又打ち寄りて
現り夢

水子戯ればや穿ち袖を返まや夜遊
の舞樂も時去りて五更の一点鐘も
鳴り。鶏の聲のほのぐと。夜も明け
白む。時の鼓數の六つ。巷の聲。又
打ち寄りて。現り夢。また打ち
寄りて。現り夢。幻とて。ありはれ。

大正十三年四月十五日印刷
大正十三年四月二十日發行

觀世流改訂謄本
大正十三年版

訂正者 丸 岡 桂
東京市神田區今川小路三丁目九番地

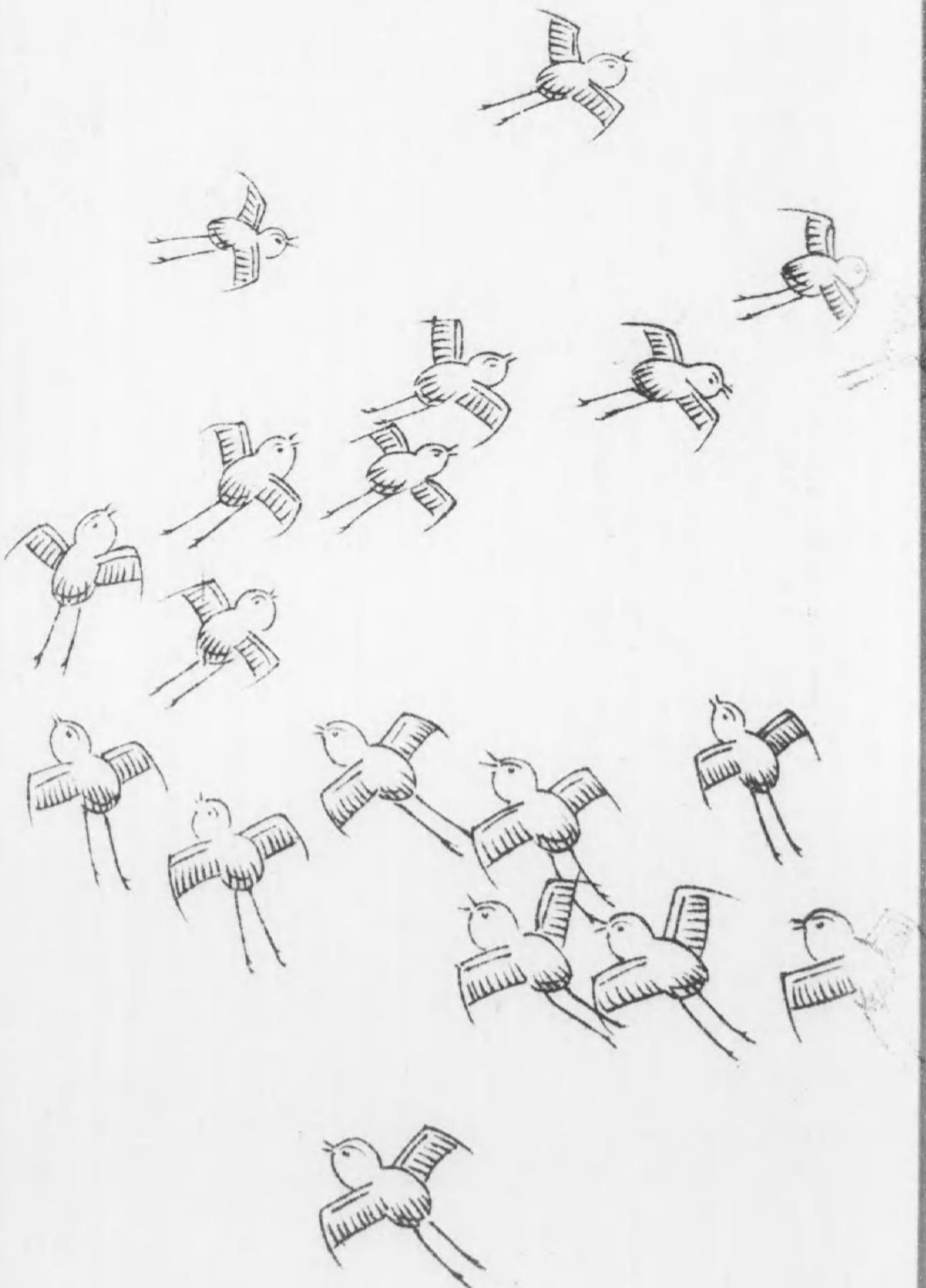
發行者 土 居 源 太 郎
東京市神田區東松下町十二番地

印刷者 鈴 木 彌 作
東京市神田區東松下町十二番地

印刷所 信 英 堂 印刷 所
東京市神田區今川小路三丁目九番地

發行所 觀世流改訂本刊行會
電話九段 二三〇五番
振替東京 一三四七五番

284
2



終